

平成23年1月1日

防衛大学校同窓会機関誌

Vol. 18

小原台だより



第58期生入校式

同窓会ホームページ URL : <http://www.bodaidisk.com/>



C O N T E N T S

■新年のご挨拶……………	3	■防大54期生に聞く	
■新幹事に聞く		防大54期生に聞く……………	19
32年ぶりの新入生所感……………	4	幹部候補生学校に入校して……………	20
■訓練部長に聞く		防大55期生以下に伝えたいこと……………	21
心の器造り ―訓練部の使命―……………	5	幹部候補生学校の所感と決意……………	22
■新防衛学教育学群長に聞く		■支部だより	
小原台だより寄稿……………	6	桜華会の活動状況……………	23
■同窓生アラカルト		■連絡事項等	
治に居て乱を忘れず 防大本館前の2期生会建立の石碑銘文の讀れ……………	8	同窓会創立50周年記念事業の紹介並びに記念行事の案内について……………	24
15年目を迎えた「322会」のこと……………	9	「小原台だより」に関するアンケート調査……………	25
日米同盟絆強化の一翼を担うJAAGA……………	10	機関誌「小原台だより」投稿のお願い……………	25
日米ネービー友好協会の紹介……………	11	平成21年度防衛大学校同窓会決算書……………	26
文民は、自衛隊の精強化にこそ力を注げ……………	12	会費の納入状況、会費納入のお願い……………	27
■期生会だより		同窓会名簿管理に関するお知らせ……………	28
防大13期生ホームカミングデイ実行委員会……………	13	期生会会長・代議員名簿……………	29
「航空19期生会卒業35周年記念行事」を盛大に挙行……………	13	同窓会本部・支部等の役員紹介……………	30
■今人生、男盛り		会員の訃報……………	31
JMASラオス代表として……………	15		
米国横断ハイウェイ・グランドスラム……………	16		
今人生、男盛り……………	17		

新年のご挨拶



防衛大学校同窓会会長 先崎 一

全国各地、並びに海外においてご活躍中の同窓会会員の皆さん、ご家族共々よき新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

会長就任後2年目となりました12期の先崎です。今年も14期から20期までの陸・海・空自衛隊OB有志によって構成された同窓会本部スタッフと共に、各支部、各期生会等との連携を図りつつ、現役とOBとの絆をより一層深めながら取り組んで参る所存です。どうぞよろしくお願い致します。

さてご承知のように、今日の我が国を取り巻く安全保障環境は、世界の多極化が進む中、益々流動的、かつ厳しさを増してきております。特に中国の軍備拡張・海洋進出、北朝鮮の核・ミサイル問題、国際テロ等の軍事的諸課題と、引き続き世界経済の低迷、地球温暖化、天然資源、水問題等、非軍事的諸課題が複雑に絡み合い、一段と混迷の度を深めつつあるように思われます。

このような中、昨年は我が国にとって日米同盟50周年の年であり、年末には民主党政権にとって始めての新防衛計画の大綱が閣議決定され、今後10年間の我が国防衛の基本的な指針が示される等、我が国安全保障上の大きな節目の年ともなりました。

新年度は防衛省・自衛隊にとり、これらに基づき引き続き日米同盟の連携強化を図りつつ、政治・経済・外交と一体となった防衛努力、なにかんずく、南西正面における統合運用体制の充実を基盤とした真の抑止態勢の確保が益々求められてきているように思います。と同時に自衛隊にとっては国内における各種事態対処はもとより、アジア太平洋地域のみならず世界的なレンジで国際協力活動・多国間協力等、官民一体となったより積極的な国際社会の平和と安定化への寄与が当たり前、かつ不可欠な時代となってきております。

そのような状況の中、今日自衛隊は永年にわたる国内外における各種任務の積み重ね等を通じて、内外から高い評価を得てきているのも事実であります。このことは自衛隊の中核を担ってきた防大同窓生にとっても誇りであり、今後更に自衛隊に対する国民の期待感・信頼感の高まりと共に、課せられる責務の重大さを感じずにはられません。

母校・防大も開校以来半世紀以上が経ち、まもなく在校生も60期生代を迎えることになります。いわば陸・海・空統合の士官学校としてスタートした防大は、現在の自衛隊統合運用の時代において今、正にその真価を問われ

ているように思います。云うまでもなく防大では、時代と共に永年にわたり培われてきた歴史・伝統・校風の下、引き続き学業・学生隊生活・校友会活動の三位一体によるバランスに配慮された軍学校としての人材育成教育がなされ、現在に至っております。今日では更に国際化時代にふさわしい素地を身につけるため海外への留学生派遣、受け入れ、交流等の拡充が一段と図られてきているように思われます。

防衛省内では新しい政権の下、このような防大の現状をさらに見つめ直し、新たな時代にふさわしい将来のあるべき姿を目指した防大改革に関する検討会議も始まっているようです。

現在1期から54期まで約23,000名の会員（現役、OBほぼ半数）を有する防大同窓会も「会員相互の親睦、母校の発展及び社会的活動への寄与」を目的に昭和36年1月設立され、本年1月をもって創立50周年を迎えることとなりました。この機会を半世紀にわたる同窓会を顧みつつ、同窓会の将来に対する決意を新たにする契機と捉え、記念事業を実施することとしております。すでに2年前から実行委員会を立ち上げ準備に着手していることはご承知の通りであります。具体的には、今年3月の記念行事（記念講演、同窓会旗・表象の制定含む）、各地域支部等の記念行事支援、並びに母校支援事業としての「防衛の務め」（初代防大校長横智雄著、復刻事業支援・・・既実施）、防大開校60周年（H24年予定）に連携した記念事業（検討中）等であります。

云うまでもなく同窓会にとって50年の節目は新たなスタートの年でもあります。同窓生はそれぞれの時代において自衛隊のリーダーとして、歴史の一端を担ってきており、これからもその重責を免れることは出来ません。特に、政軍関係のあり方、日米同盟のあり方、尖閣列島事案等に見られる、我が国危機管理体制のあり方等の諸課題が問われている昨今、防大同窓生に期待される役割は益々大きくなってきております。

改めてこの節目にあたり、同窓生としての誇りと絆を大切にし、相互啓発しつつ、より充実した同窓会活動を目指してまいりたいと思います。

会員の皆様にとって今年がご家族共々健やかで、幸多き年となりますよう祈念し、新年のご挨拶とさせていただきます。

32年ぶりの新入生所感

防衛大学校幹事 陸将 宮下 寿広(22期・陸上)



1 はじめに

日本全国並びに世界各地でご活躍の防衛大学校同窓生の皆さん、私は昨年7月26日付で第42代幹事に着任した宮下陸将です。陸上自衛官として任官以来32年ぶりに母校に勤務することとなりました。専攻は管理学科(公共政策学科の前身)で、昭和49年4月人文・社会科学専攻課程開設とともに防衛大学校に入校しました。皆さん承知の通り防衛大学校の教育訓練は、「広い視野を開き、科学的な思考力を養い、豊かな人間性をつかうことに留意して、その効果を総合発揮する」よう計画実施されます。

人社系出身の私が如何にして科学的な思考力を養ったかについては、現在学校内で実施されている教育改革の主要な検討テーマの一つですが、全省一丸となって検討されている防衛大学校改革の結論に譲ることとして、ここでは32年ぶりに小原台の門をくぐった新入生としての所感を紹介したいと思います。

2 不易流行

幹事として母校に戻った私が最初に考えたことは、防衛大学校の「不易流行」とは何かです。防衛大学校は昭和28年発足以来、自衛隊の幹部となるべき人材を養成して、すでに2万人を超える卒業生を輩出しました。その使命と責任は、21世紀においても不変と思います。しかし、卒業生が21世紀に果たすべき役割はますます拡大し、今後の国内外情勢の変化に柔軟に対応出来る優れた幹部自衛官を育成することが急務となっています。

ご承知の通り防衛大学校はそのために、教育課程(平成3年度以来学位を授与)、学生舎生活(平成15年度から学年混合八名一室に移行中)、校友会活動という「三本柱」を通じて、知育、徳育、体育を重視しています。

一方、昨今防衛大学校学生による不祥事が生じたり、学生舎に悪しき慣習が生まれているのも事実です。この様な時に「良き伝統とは何か」、「後世に伝えるべき防衛大学校精神は何か」と言うことを若い指導官・教官等に教え諭し、学生を感化するのが幹事の務めと認識しました。幹事着任後に横先生の「防衛の務め」を再読してその意を更に強くしました。

3 防衛大学校改革の推進

平成22年9月24日、北澤防衛大臣が防衛大学校を訪れ、五百簾頭学校長に対し「防衛大学校改革に関する防衛大臣指示」を手交されました。防衛大臣は、「①防衛省・

自衛隊における防衛大学校の使命と役割の再認識、②建学の精神に照らした自己評価、③幹部自衛官に相応しい素地を持つ質の高い受験生を確保していくための施策、④21世紀に自衛隊が担う役割に対する優れた知力及び体力と豊かな人間性を備えた幹部自衛官を育成するための教育訓練と研究の在り方、⑤上記の課題を適切に果たし続けるための態勢の在り方」の5項目について検討し、平成23年4月末を目途に報告せよと具体的に指示されました。

五百簾頭学校長は、「我々教職員、学生ともども、未来の人材を築く崇高な任務に全力を尽くしたいと思います。」と大臣に答えられました。

昨年来、校内では検討チームが立ち上げられ全校一丸となって広範多岐にわたる検討を積極的に推進するとともに、学校長以下学校幹部も省内の各種検討会議に参加し防衛省・自衛隊が一体となって、21世紀に幹部自衛官として活躍できる防衛大学校学生を育成するための改革に取り組んでいます。

同窓生の皆さんの中にも、それぞれの立場におかれて今回の防衛大学校改革に関わられている方が多いと思いますが、防衛大学校改革の原動力はまさに同窓生の「母校愛」と確信しています。

4 終わりに

昨年9月元幹事の君塚東北方面総監のお招きで五百簾頭学校長とともに東北方面隊創立五十年記念式典に参加しました。学校長には地域と連携し、地域に支えられて厳しい任務を遂行してきた陸上自衛隊の地位と役割を十二分に実感して頂きました。仙台への途次乗車した東北新幹線の車内紙で、伊集院静氏の「差しのべる手」という随筆を拝読しました。「日本人には育とうとする若木に手を差しのべ、無事を祈る習慣がある。若い時はそれに気がつかない。」という一文がありました。幹事として着任以来五百簾頭学校長をはじめ教官・事務官・自衛官をとわず多くの教職員が、育とうとしている学生達に手を差しのべている姿に接しました。今それに気がつかない学生達も何時の日か小原台に戻った時に、きっとそれに気がつくと思います。その様な思いで幹事としての職務に毎日全力投球しています。

心の器造り — 訓練部の使命 —

防衛大学校訓練部長 山口 透 (22期・海上)



平成22年4月7日、538名の若者が防衛大学校学生としての宣誓を行い、第58期生として入校しました。帝国陸軍士官学校を終戦の年の6月に卒業したのが陸士58期生ですので、防衛大学校の歴史も重みをもったものとなってまいりました。

近年の小原台の変容振りは以前の本誌でも度々紹介されているところであり、8人部屋となった新学生舎整備も残すところ第1大隊の1棟のみとなりました。逐年の施設整備や留学機会の増大などが相まって、小原台は将来の幹部自衛官摇篮の地として益々充実したものとなっております。一方で、本科学生の生活は教場、学生舎、校友会を大きな柱とするもので、本質的に創設期以来変わりのないものであり、学生は今日も自主自律の旗印の下自己研鑽に励んでいます。しかしながら、本年2月に生じた複数の学生による性犯罪などの不祥事を未然に防止してやれなかったことは慙愧の限りであり、心の教育が時代の変化に適切に対応していなかったのではないかという深い後悔があります。こうした中で、訓練部としては社会環境等の進展に対応し、かつ建学の精神に根差した学生の内面的進展を図り得よう努力をしているところであります。

防大での本科学生の学問が伸展性のある知的器（うつわ）を養うものであるとすれば、訓練部が所掌する事項は学生に幹部自衛官として必要な基盤を習得させ、併せて高い徳操を持った資質、言い換えれば心の器を養うことであります。特に将来の職責に応じ得る強い倫理感に裏付けられた心の器造りは、建学以来の大きな目標であると思っています。

昨年、防衛大学校同窓会のご努力により「防衛の務め」が新版として上梓され、学生の副読本となっています。この中で横初代学校長は「人の尊きは立派な行いを自ら進んで行くところにある。」と述べておられます。これは自主自律の本旨を端的に言い表したものであると思いますが、現在の学生は入校前の教育や経験に正義、忠誠、自己犠牲などの徳目の色が薄いため、「立派な行い」が何を意味するのかに迷っているように見えます。もちろん学生綱領に廉恥、真勇、礼節が語られていますが、学生がこの綱領から直ちに具体的行為を想起するには困難があります。このため、本年度当初から学校長の指導のもと、①暴力的、威圧的手段を排除した慈愛による下級生指導、②部内外を問わない挨拶の励行、③教場における居眠りの防止を強く学生に求めています。これらは平易で当たり前のことでありますが、その継続的な実践に

は強い意志を要します。ニューヨーク地下鉄の治安改善に車内外の落書き排除が大きな効果を発揮したという逸話は有名であります。同様に幹部自衛官として歪のない正しい心の器を作るためには、このような基本的な徳目を迷いなく実践できることも必要であります。有名な米陸軍士官学校の名譽律も「嘘をつくな。あざむくな。盗むな。」と極めて平易であります。真の実践は極めて困難な戒律を掲げています。原文は「A cadet will not lie, cheat, steal, or tolerate those who do」であり、後段はそのような行為を見逃してはならないというものです。平易であるが道義に則った正しいことを強い意志をもって自ら実践し、他の学生の逸脱に対しては勇気をもって諫めるということが、自主自律、積極敢為という建学時の理念に近づく道筋であると考えています。併せて、延灯や外出の運用を一部学生に委任するなど自主性の啓発を行った結果、学生自身の意識も僅かずつ変化しており、課業行進の節度、勉学への態度、文官教官に対する敬意などに改善が見られ、学生企画の活動も活発化しております。

訓練については陸海空各自衛隊活動の原点を体得することに主眼を置き、幹部任官後の多様な活動に対応できる伸展性のある資質の育成に努めています。特に、各要員としての意識、要員マインドをしっかりと植えつけ、現場で活躍できる自衛官としての心の器を形成しようとするものです。各自衛隊の幹部候補生学校が主として初級幹部に必要な識能を付与することに力点を置いているのに対し、防大における学生の訓練は「将来幹部自衛官として必要な基盤となる資質、基礎的な識能を養成する。」ことを目的としています。言い換えれば、防大卒業後三十年を越える幹部自衛官としてのキャリアに必要な土台を築くのが防大における訓練の使命であります。そのため、陸においては普通科的素養、海においてはシーマンシップ、空においてはエアマンシップの涵養など、各自衛隊の基礎となる訓練を充実させております。念願であったグライダー訓練の導入により、航空要員のエアマンシップ教育も一層充実したものとなりました。

先般、防衛大臣から防衛大学校改革に関する指示が出されました。訓練部としても、建学の原点に立ち戻り未来に向けてのあるべき姿を求める一連の検討に真摯に取り組んで参りたいと考えています。

小原台だより 寄稿

防衛学教育学群長 小原台事務局長 空将補 尾上 定正(26期・航空)



28年ぶりに赴任した小原台は本館始め見慣れない立派な建物が立ち並び、猛暑の中、大いなる期待と一抹の不安を抱えた私を、古ぼけた防衛学館と統率・戦史室の看板が迎えてくれた。それから早2ヶ月余り、本誌が同窓会員の皆様に届く頃には半年が経ち、すっかり防大勤務にも馴染んでいると思う。この機会を利用して学群長としての勤務状況等を紹介し、防大の現状の一端をご理解頂きたい。

1 空将補の学群長

防大へ異動するという情報を聞きつけた多くの方から、配置は？何か問題を起こしたのか？等々、多くの疑問符を受け取った。防大の役職に空将補のポストが無いことをご存じの方には無理もない疑問である。防衛学教育学群長は1等空佐の配置であったが、五百旗頭学校長、外園空幕長等のご尽力により、22年度当初から空将補に格上げされ、夏の定期異動で不肖私が補職された次第である。防大には陸将の幹事、海将補の訓練部長がいて、空自だけ将官不在であったため、空将補ポストを得ることは防大・空自の長年の悲願であった。この度、学生への目標像として、また知育・徳育を担う防衛学教育の充実の観点から、極めて厳しい組織定員等に対する査定状況にも拘らず、純増で将補ポストの格上げを得た意義は極めて大きい。財務・総務当局との困難な調整を担当された関係者に感謝申し上げるとともに、その期待に添えるよう、誠心誠意、勤務に精励して参りたい。

防衛学群長は、学校長の命を受け群務を掌理するという職務を主体に、兼ねて防衛大学校教授を命ぜられ、統率・戦史教育室に所属し、3学年の「統率」2クラス及び4学年の「防衛学特論」2クラスの教務を行っている。恒常業務、各種会議等に加え、学生教育に関わる実務がかなりの仕事量であることを今、実感しているところである。防衛学群長はその他に、同窓会小原台事務局長、日本防衛学会理事（研究発表大会実行委員）、グライダー部長等の配置指定付加職務、更には国際防衛学セミナー、環太平洋士官学校長会議の実行委員、開始されたばかりの防大改革の検討委員等、多くの幅広かつ重要な職務を担っており、将補ポストに相応しい要職であると思う。組織編制上は、教務部長の下に6個学群が横並びで所属するため、他学群長との並びを尊重する必要もあり、柔軟かつ応変の対応が求められるポストでもある。

2 教務を通じて見る防大生

夏の異動で着任した防衛学の教官は、前任者の講義を引き継ぐことになる。大学設置基準に準拠したカリキュラムは、前期・後期ともに1科目15週（回）の講義が計画される。

今回の人事は7月末であったため、ちょうど夏の定期訓練が終了し、学生は夏季休暇に入る時期、前期カリキュラムの3分の2が終了した時点での引き継ぎとなった。科目の途中で教官が交代するのは学生にとっても教官にとっても難しいものだが、幸い、3週間余りの夏季休暇が、教官にとっては講義の準備に、学生にとっては気分転換に有益であった。

防大生と言えば「居眠り」。正直、私も学生時代は、学生舎と交友会活動の緊張と疲労に対し、教場だけがホッとできる空間であり、意識を無くしたことが間々あった。覚悟して臨んだ講義であったが、思ったよりも学生諸君は頑張っている話を聞いてくれている。経歴紹介や英語の必要性、部隊勤務のエピソード等、あらゆる知識と経験を動員して学生の興味を掻き立てる教官の努力は当然として、やはり、学生諸君とのコミュニケーション、言葉のキャッチボールが必要不可欠である。間もなく60年を迎える防衛大学校は、紆余曲折を経ながらも建学の精神を守り、将来の幹部自衛官を目指す学生諸君の志は、昔も今も変わらないと感じている。

その一方でやや気にかかるのは、今風の学生気質あるいは積年の陋習の弊害のような傾向が学生全般に見られることである。学生は将来幹部自衛官になることをしばしば口にするのだが、その意味を正確に理解し本心から望んでいるのか、確信が持てない場合がある。学生隊での指導をオウム返しにしているような、あるいは暗記した模範解答を誦んじるような印象を受ける学生が多い。また、自分はどうなりたいか、どうしたいかということよりも、仲間からどう見られるかという発想が先に立ち、批判されたくない、失敗したくないという消極的な態度に傾きがちであるように思う。学生諸君には失敗を恐れずに、もっと伸び伸びとやりたいことをやって自分を高めることが大切だと、機会ある毎に論じている。当時の自分への反省も込めて・・・

3 防大改革の行方

劇的に変化した安全保障環境の下で多様な任務を遂行する自衛隊の幹部候補生を育成することが今後も変わらない防衛大学校の使命であり、少子化を前提に質の高い学生を必要数確保するための様々な改革や施策を模索する努力は常に行われなければならない。入学生の偏差値が長期低下傾向にあるのではないかという危機感は、防衛省全体でこの改革に取り組むという動きとなった。防衛副大臣の下に設置された改革検討委員会は、幹部自衛官に相応しい素地を持つ質の高い受験生を確保していくための施策、21世紀に自衛隊が担う役割に対応する優れた知力及び体力と豊かな人間性を備えた幹部自衛官を育成するための教育訓練と研究のあり方等の五

項目を検討の柱として、来年の4月末を目途に報告を取りまとめる予定である。

防大は既に質の高い学生確保のための検討を先行的に実施しており、防衛学群も今一度防衛学教育の原点に立ち返り、カリキュラムの見直し等を実施しているところである。省の防大改革の視野は更に広く、教官人事のあり方、訓練部や学生隊との連携、入試制度に果たすべき防衛学群の役割等、一層の検討が必要である。幸い、防衛学群長は防大に設置された改革検討委員会の委員に指定されたので、学群全体としての検討成果をもって、防衛省全体の取り組みに寄与できるよう努力したい。

現役の防大生は、私にとって息子、娘と同年代であり、彼らにとっては父親と同じオヤジに見えるだろう。世代の格差はあって当然、むしろそれを乗り越えるプロ意識、国防を使命とする連帯感を、彼らに感じて欲しいと思う。彼らが私の年代になった時に、更に素晴らしくなった小原台でもっと優秀な学生教育を担ってくれることを期待して・・・。



同窓生アラカルト

治に居て乱を忘れず 防大本館前の2期生会建立の石碑銘文の謂れ



高岩 利彦(2期・陸上)

「治に居て乱を忘れず」は、中国の易経（えききょう）の繫辞（けいじ）伝に載っている言葉で「君子は、安きに居て危を忘れず、存して亡を忘れず、治に居て乱を忘れず」の一部である。君子たるもの、万一の場合を想定して、常日頃から戒心用意を怠らなければ、その身は安く、国家をも安泰に保つことが出来る。

長い間平和が続くと安全保障の問題に関心になり、平和や安全の有り難さを忘れてしまう。「治に居て乱を忘れず」は、そのことを戒める古くて新しい言葉である。

【独立国日本を目指して】

戦後、新憲法によって、日本は軍事力を持たない国になった。日本有事の際は国連が対処するので、安心して経済復興に専念するようと言うことだった。わが国はアメリカの49番目の州とも言われ、外部からの脅威に対応することなく励んだ結果、急速に復興していった。

昭和25年、朝鮮戦争が勃発。日本駐留の米軍が一部朝鮮半島に移駐し、その穴埋めに警察予備隊が生まれた。朝鮮戦争は朝鮮半島で行われた戦争であったが、世界を二分する戦争でもあった。朝鮮戦争による軍需景気もあって、著しい復興を遂げた日本に米国は期待するようになり、世界の軍事バランス上、日本がアメリカの一翼を担う必要性が生じてきた。

時の総理大臣吉田茂は、日本が再び独立国家となって、先進諸国と肩を並べるには、この機会を生かすしかないという日本の将来像を描いた。そして、警察予備隊は保安隊となり、保安大学校が誕生し、ここに独立国日本の骨格が形造られた。

昭和29年4月、全国津々浦々から集まったわれわれ2期生は、保安大学校入校の動機について、誰も語ることはなかったが、まさに千差万別、百人百様であった。それが4年後、良くも悪くも「生みの親吉田茂」を信じ、わが国の進むべき道に幸多かれと、この道で踏ん張る決意をして巣立った。

【治に居て乱を忘れず】

村上春樹著「1Q84」がベストセラーだ。一体1984年

に何があったのか。

われわれ2期生にとっての1984年（昭和59年）は、入校30周年を迎えるにあたって、一抹の不安を感じていた頃であった。それは、これからの10年間で、ほとんどの2期生が現役を離れることになり、その後の日本の安全保障の先行きが読めないからであった。期生会は、入校30周年記念事業を実施することにし、一案として防大の体育館に大型の時計を寄付したいと、防大在籍者に協力を求めた。これを受けた同期生の北野教授は郷原教授と検討に入った。数年後には止まってしまった時計、時間の合っていない時計、誰からも振り向かれない時計が想像され、管理に問題がある。そこで、「末永く記念になり、防大創設時代の卒業生に相応しい、歴史的に価値あるもの」をと考えた結果、防衛大学校「生みの親」である吉田茂氏の筆による「居於治不忘乱」を刻んだ石碑となった。



本館前に鎮座した吉田氏の「石」と横氏の「樹」

吉田茂氏の色紙を、1期生の平間洋一氏から借り受けて拡大コピーし、業者に依頼して銘板とした。そもそもこの色紙の存在は、昭和32年の1期生卒業前に遡る。

1期生が卒業を前に卒業アルバムの編集に際し、資金調達の経緯から吉田茂邸を訪問した。

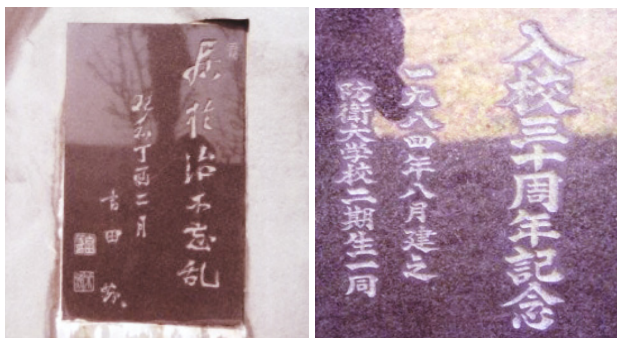
この時に「居於治不忘乱」の色紙とともに卒業アルバムの補助として金一封を賜ったと聞いている。平間氏は当時卒業アルバム作成の編集長であった。1期生を送り出すにあたって、吉田氏には複雑な思いがあったに違いない。というのは、未だ戦力として認知されていない自衛隊に、1期生を送り出すには忍びないとの思いがあったに違いないからである。

そして、この色紙を使わせて頂くには、吉田氏にお断りしなければと、当時防衛学教授の郷原一保君は、東京渋谷の松濤町にある能楽堂近くの吉田邸を訪れ、吉田茂氏（昭和42年没）の三女和子氏（麻生太郎氏のお母さん）にお会いし快諾を得た。

石は、当時防衛大学校教授であった北野昌則君と郷原一保君が、休日を費やしてマイカーで三浦半島中探し回

り、最終的に北野君が技術支援していた建設機械関係の会社から譲り受けることが出来た。石の裏側は「入校三十周年記念 一九八四年八月建之 防衛大学校二期生一同」と刻まれた。碑の建立にあたっては当然1期生先輩諸兄の了解を得ておく必要があると思っていたが、北野・郷原両君が土田国保学校長に相談に伺ったところ、「1期生には玄関先の右側を空けておくから大丈夫」とのご決断を得た。このようにして、久里浜の仮校舎を経験した1・2期生の記念碑の位置は決定された。

やがて、トラックで運ぶことの出来る重さでしかない石が、「居於治不忘乱」と刻み込まれたことによって、われわれ2期生にとって決して動かすことの出来ない重いものになったのである。



石の表側 居於治不忘乱

石の裏側

更に4年後の卒業30周年には「母校のためになること」「会員の生涯の記念品」を柱に検討し、防衛大学校学術・教育振興会に200万円を寄付することを事業の第1にあげた。(財)防衛大学校学術・教育振興会は、防衛大学校の教育研究振興のために、土田国保学校長が在任当時設立したもので、当時同期生の北野昌則君が理工学研究科(大学院)の委員長として財団の設立に携わっていた。この基金はその後、母校の発展に寄与し、現在も受け継がれている。次に、この頃、われわれの子供たちが適齢期を迎えるのも間近であろうと、晴れ舞台でも通用するネクタイピンとカフスボタンのセットを記念品としてつくることになった。黒の原石に金色の縁を取り、校章を入れた上品なセットが出来上がり、年末の祝賀会までに送付を完了した。寄付金は、土田振興会会長(元校長)を祝賀会に招請し、冒頭に高畑会長から直接贈呈した。このようにして、石碑、基金、記念品の3点セットの事業は実行されたのである。今では、石碑のそばに2期生卒業50周年記念の「楨」が植えられ、吉田氏の「石」と楨氏の「樹」が、防衛大学校の歴史をつぶさに見守っているかのように、雅趣に富む佇まいを見せている。



防衛大学校本館全景。本館の左右に「楨の樹」が小さく見えています。左側が1期生の楨の樹、右側が2期生の楨の樹。

閑話休題、最近、国際政治の舞台で経済力が大きい20カ国(G20)が経済問題解決策を話し合う会議を開

いている。わが国は、20カ国の内の先進8カ国(G8)のグループにもいる。今や、苦難の道乗り越えた独立国日本は、世界をリードするグループに仲間入りし、世界平和に向かって、役割を果たす立場にある。その世界の信頼を得た独立国日本を支えているのは、他でもない実力集団自衛隊なのである。世界は実力集団として自衛隊を認知し、日本を信頼に値する国と認めているのである。信頼を得る迄には50年以上もの長い期間を要した。

楨校長は昭和33年の2期生の卒業式における式辞で、「人氣と大切な仕事に従事することは全く別のことであります」「拍手が迎える舞台を夢見るな」「諸君の仕事は大切で重い任務なのだ」と述べ、われわれの不安を取り除こうとされた。楨校長は、われわれを送り出す時、日本の進路を決定づける2年後の安保改定時の事態(60年安保)を予測され、任務の重大さを強調、懇切丁寧に諭されたのである。

科学技術の発達に伴い、国際関係も日に日に変化する中で、あらゆる分野で世界をリードする実力を有するわが国が、世界のリーダー国を自認するならば、先進国、発展途上国、未だ国家の体をなしていない地域をも含めた「世界平和」を視野に入れたリーダーシップを発揮する覚悟が必要であると思う。現実には誰も正解を出しえない長くて遠い道のりであるとはいえ、備えを怠るわけにはいかない。

防衛大学校生みの親、吉田茂氏は、1期生に託した「治に居て乱を忘れず」の思いで、今も独立国日本の行く末を見守っているに違いない。(2010.7.10記)

15年目を迎えた「322会」のこと



海野 幹郎(5期・海上)

「322会」と聞いて、何のこっちゃ? と思う人が多いと思うが、実は昭和32年(1957)4月に、小原台に完成したばかりのピカピカの防大に5期生として入校し、322小隊に配属された同期生の集まりの会のことである。出身地は全国各地で、出身高校もばらばらであるが共通点と云えば、全員が第1外国語として「ロシア語」を選考したロシア語班員で、なぜか気が合って忘れられない仲間たちの会である。

当時は、8人部屋で、4年生が室長、残り6、7人が1年生という構成で、3部屋合わせて20人の1年生がいた。その時の4年生は2期生で、50年経過した今でも名前が4人ともすぐ出てくるほどの立派なそして懐かしい先輩たちであった。

322会の設立経緯は、平成7年11月都内に在住する元322小隊だった3、4名が飯田橋にあるおでん屋へ集まり、ほとんど皆が退官して自由の身になったので入校時同じ

小隊にいた懐かしい仲間達を集めて322会を作ろうということになり、それぞれ入校時の仲間の名前を思い出し、住所を探し出して、平成8年3月22日 同いおでん屋で、少人数ながら第1回の322会が開催された。

それ以来、毎年1回集まることにして、日程として3月は忙しい時期なので1月22日にして、しばらく実施されてきたが、覚えやすい322の名前のとおり3月22日に実施しようということになり、今年は森本直孝君の幹事で第15回目を星陵会館で実施した。

元々のメンバーは、陸上が13名、海上が5名、航空が2名だったが、現在では、3名が亡くなり、1名が音信不通となり、残り16名で連絡を取り合っているが、今年集まったのは6名であった。欠席の理由は、体調不良が3名、遠距離（九州）が1名、その他が6名であった。特筆すべきは兵庫県の揖保川町から毎年必ず参加する金田一郎君だ。

今年集まった6人のうち、3人は一病を抱えているが、明るく元気に生きており、来年も集まろうと誓い合っ別れた。みんな古希を過ぎたのでいつまで続くかわからないが、しぶといゴキブリの5期生だ、しばらくは頑張るだろう。防大同窓会の中でも大変ユニークなクラス会だと思うので参考までに紹介した。

日米同盟絆強化の一翼を担うJAAGA



JAAGA 広報担当理事
源 外志明(16期・航空)

自衛隊を退職してから早や5年が経過しようとしています。私は、退職直後から「日米エアフォース友好協会」(Japan-America Air Force Goodwill Association 略称「JAAGA」)に属し、広報の理事として活動してまいりました。JAAGAの会長以下役員のほとんどが防大同窓生であり、本機関誌に投稿できる機会が与えられたので、ここにJAAGAの活動状況について紹介し、皆様のご理解を賜われればと思う次第です。

JAAGAは、「航空自衛隊と米空軍との相互理解及び友好親善の増進に寄与する事業を推進し、日米両国の信頼関係の向上に貢献する」ことを目的とし、平成8年7月、航空自衛隊退職者団体である「つばさ会」の付属組織として創立されました。平成23年には、創立15周年を迎えようとしています。

JAAGAは、現役航空自衛官の心温まる理解とともに、在日米空軍の司令官を初めとして多くの方々からその活動は高く評価されているところであり、日米同盟の絆の強化に果たす役割は大きいと自負しているところです。

JAAGAは、年度ごとに事業計画を立て、①航空自衛隊員及び米空軍軍人の激励 ②日米隊員の交流等支援

③米空軍軍人の日本研修等支援 ④航空自衛隊・米空軍との交流 ⑤広報及び広報協力等の事業を行っています。平成21年度には次のような事業を行いました。

- 1 日米隊員の激励として、「日米共同訓練（レッド・フラッグ・アラスカ、コープ・ノース・グアム）参加隊員の激励」と「日米隊員の表彰（那覇基地隊員クラブ、入間基地入間イン、三沢基地隊員クラブにおいて、日米相互交流に貢献した米空軍軍人及び空自隊員を表彰）」
- 2 日米隊員の交流支援として、「三沢、横田、嘉手納、松島、那覇の各基地で実施された日米下士官相互部隊研修に参加する日米隊員の支援」
- 3 米空軍軍人の日本研修等支援として、「米空軍軍人の日本文化研修（日光等史跡研修）の支援」、さらには、米空軍軍人の地域行事等支援として、「三沢、横田、嘉手納地域でのスペシャル・オリンピック（知的障害を持つ人たちにスポーツの楽しさを体験してもらう行事）の支援」
- 4 JAAGAと航空自衛隊・米空軍との交流として、「米軍多摩ヒルズにおけるゴルフ競技会 SPORTEX'09の開催」、「米空軍指揮官交代行事等への出席」、「来日した米空軍関係者の接遇」、そして、「米空軍協会（AFA）総会への参加」

在日米空軍各基地との連携の強化のため、「各基地における米国独立記念祭、エアフォース・ボール、昇任パーティ、オープン・ハウス等への参加」と「横田基地友好協会等関係団体との交流」

- 5 広報及び広報協力として、「日米要人等の講演（21年度は、統幕運用部長及び米空軍第18航空団司令の講演を戴きました。）」、そして、「JAAGA賛助会員の米軍横田基地研修と嘉手納基地等研修」



SPORTEX'09B 集合写真



SPORTEX'09B Lunch風景

JAAGAは、講演会・懇親会とともに年1回の総会を行い、役員会を年4回、理事会を年7回行っています。また、JAAGAの会報として、「日米エアフォース友好

協会だより」を年2回発行しています。

JAAGAは、正会員、賛助会員、名誉会員で構成されており、三沢及び沖縄に支部が設けられています。正会員は「航空自衛隊のOBで、本会の趣旨に賛同して入会を希望し、会長が入会を承認した者」、賛助会員は「本会の趣旨に賛同し本会の事業に協力する個人及び法人で、役員会の審議を経て会長が承認した者」となっています。名誉会員は「米第5空軍司令官経験者で、会長の入会要請に応じて入会を受諾した者」となっております。

会勢拡張目標を正会員300名、個人賛助会員50名、法人賛助会員50社と定め精力的に活動しておりますので、今後とも、同窓生の皆様におかれましても、入会希望、推薦、情報提供等がございましたら、ご連絡を賜りますようお願いいたします。

なお、JAAGAのホームページは以下のとおりですので、是非ご覧になって、ご理解を深めて頂きます様宜しくお願いします。
<http://www.jaaga.jp/>

日米ネービー友好協会の紹介



植月 政則(18期・海上)

「小原台だより」の紙面をお借りして、日米ネービー友好協会（以下、JANAFAと略）の紹介をさせていただきます。

1 JANAFA創立の経緯

JANAFA (The U.S.-Japan Navy Friendship Association) は、平成2年(1990年)夏、イラクによるクェート侵攻が生じた時、時の政府の対応が日米同盟の信頼関係に及ぼす影響に対する危惧から、同盟の中核である海上自衛隊と米海軍(両ネービー)との相互理解・信頼の増進の為、海上自衛隊OBを主体とし、防衛関連企業や一般の賛同を得て、両ネービーの現役を支援する組織を作ろうとして、平成3年(1991年)4月1日に設立されました。最初の事業は、設立総会開催(5月16日)前の同年4月17日、湾岸戦争のインド洋での作戦から帰投した「ミッドウェー・バトルグループ」を横須賀港外で出迎え、艦隊全乗員に一人一缶のビールを贈呈し、凱旋を祝い、慰労しました。この事業は、「ワン・キャン・ワンパースンのビール贈呈」として大いに感謝されました。

2 JANAFAの目的及び活動の重点項目

JANAFAは、海上自衛隊と米海軍との友好親善及び相互理解の増進に寄与することを目的としています。なお、活動の重点項目は、次のとおりです。

- (1) 海上自衛隊と米海軍との友好親善及び相互理解の増進のための活動及び支援

- (2) 海上自衛隊と米海軍との緊密な連携及び信頼関係の向上のための活動及び支援
- (3) 会の活動状況の広報及び会勢の維持・拡充
- (4) 会員相互の親睦及び行事への積極的参加の促進

3 JANAFAの会員、役員

JANAFAの会員は、名誉会員、正会員、賛助会員から成っています。

名誉会員は、海上自衛隊と米海軍との友好親善及び相互理解の増進に著しく寄与する等の功績のあった方で、理事会の承認を経て、会長が委嘱しています。主として在日米海軍の退官された将官で、現在6名の名誉会員がおられます。

正会員は、海上自衛隊の出身者で本会の趣旨に賛同して入会を希望し、会長が入会を承認した方で、約400人の会勢であります。

賛助会員は、本会の趣旨に賛同し、本会の事業に協力する個人及び法人であり、個人賛助会員は、約200人、法人賛助会員は、約40社です。

一方、JANAFAの会務を掌理する役員として、会長、副会長、理事及び監事が組織されており、会長1名、副会長が3名、理事が約30名、監事2名の陣容で、年度の各種事業を推進しております。



海上自衛隊及び米海軍の部隊への感謝状贈呈:JANAFA活動の例

4 JANAFAの事業

JANAFAは、毎年度ごと事業計画を立案し、推進しております。事業の項目としては、①海上自衛隊と米海軍との友好親善及び相互理解の増進、②海上自衛隊と米海軍の友好親善及び相互理解の増進に関する海上自衛隊の施策に対する協力、③その他、本会の目的達成のために必要な事項であります。具体的には、①JANAFAの総会、講演会、懇親会、②JANAFAの目的に著しく貢献した米海軍及び海上自衛隊の部隊、隊員及び功労者、協力者等に対する顕彰、③在日米海軍の指揮官等を対象に日本の伝統と文化に造詣を深めてもらうために「日光東照宮・益子焼窯元」、「小田原北条五代大祭り」、「鎌倉八幡宮流鏑馬」、「金龍山浅草寺」、「大谷庭園、美術館」等の研修、④米海軍候補生のホームステイ、⑤会員を対象に海上自衛隊及び米海軍の部隊研修、⑥海上自衛隊及び米海軍の各種式典、行事への参加、⑦JANAFA会報誌の発刊(年2回)、⑧JANAFAホームページ(<http://janafa.com/>)の運営、など多彩な事業を実施しております。

5 その他

JANAFAは、その創立の経緯、目的、事業等で紹介しましたとおり、日米同盟の基軸である海上自衛隊と米海軍が益々連携を図り、お互いに携えて、日本の安寧と世界の安定に大きく貢献されることを側面から支援し、活動している団体であります。防衛大学校出身の海上自衛隊OBも役員として活躍し、事業を推進しております。

JANAFAは、来年5月で創立20周年の節目にあたりますが、JANAFAの初代会長 石田捨雄OB（第9代海上幕僚長、海兵64期）が創設時に示された「高く掲げた松明の火の輝きを愈々増すように努めよう」の初志を堅持し、JANAFAの目的に沿う活動を展開し、会勢を盛り上げるよう精進しております。

文民は、自衛隊の精強化にこそ力を注げ



参議院議員

宇都 隆史(42期・航空)

防衛大学校同窓会の皆様、明けましておめでとうございます。四十二期生の宇都隆史（うとたかし）です。この度の夏の参議院選挙におきましては、全国の諸先輩方より御指導やお力添えを頂き、辛くも初当選させていただくことが叶いました。改めまして、心からの感謝を申し上げます。

国防という崇高な任務より中途退職しての政治家への転身ではありますが、自衛官として培った「防人の矜持」を胸の内にしっかりと結わえ、国家国益を第一義とし、専心政務に身を捧げる所存です。今後とも一層の御鞭撻を賜れば、幸甚の至りに存じます。

さて、この度は「小原台だより」への寄稿をご依頼いただきました。身に余ることではございますが、拙文ながら一筆献上させていただきたく存じます。

昨年末、臨時国会の参議院予算委員会にて、官房長官の「自衛隊は暴力装置」という発言が問題視された。ドイツの社会学者マックスウェーバーは、その著書「職業としての政治」において、「国家とは、ある一定の領域の内部で、正当な物理的暴力行使の独占を要求する人間共同体である」と書いたが、国家における軍事機構＝暴力装置とは定義していない。この用語は、マルクス主義者が「国家権力の本質は暴力装置である」という暴力革命を正当化する理論として使用したものである。ゆえに、今回の官房長官発言は、「自衛隊員の気持ちを踏みにじる左翼的発言だ」という悪印象を与えた。しかし、問題とされるべきは、「暴力装置」の言葉そのものよりも、自衛隊という存在をどのように解釈するのかというところにある。つまり、「実力組織であるから、暴走しない

ように管理すべきである」と捉えるのか、それとも、「実力があるからこそ、他の脅威を排除できるのであって、更なる精強さを追求すべきである」と捉えるのかということだ。今回の発言は、前者の思想背景をにじませる発言だったことは否めない。しかし、本来はどちらかの解釈が間違っているということではない。政府と軍の適切な関係を保つことは、ずっと古い時代から、政治の最大の課題であった。その中で、近代国家は、民衆によって選出された代表者によって軍をマネジメントするという「文民統制（シビリアンコントロール）」というシステムを考え出したのである。

ところが、我が国における戦後のシビリアンコントロールは、一貫して「左翼的解釈」が強すぎる傾向にあったのではない。そのために、防衛省（旧防衛庁）という役所も、政策官庁としてではなく「自衛隊を管理すること」を主たる目的としてきたように思う。この傾向は、一昨年8月に生じた政権交代以降ますます顕著となり、現職連隊長の訓示内容を受けての更迭事案にみられるように、自衛官に対する管理体制を強めてゆき、更には自衛隊協力団体の発言にまで、政治的中立性を求める通達を出すという「言論統制」ともいえるべき常軌を逸した行動にまでエスカレートした。

ここで、「自衛官に政治的中立が求められる理由」という本質を考えると、「実力組織が政治的意図をもって行動すること」による、国家の秩序崩壊を防ぐためであることは言うまでもない。それは、決して自衛官の思想信条を統制するものでもなければ、間違っても一般国民である協力団体会員の表現の自由を侵すものであってはならないはずだ。本通達によれば、『協力団体の長が、特定の内閣に反対する発言をしたことは、自衛隊法施行令第87条第12項の「政治目的のために国の庁舎、施設、資材又は資金を利用し、または利用させること。」に違反したという誤解を与える可能性がある。』としているが、その会場にいた者は、全員が招待を受けた自衛隊親派であり、「自衛官が特定の意思を持って、あのような発言をさせたのではないか」などと勘繰る者などいなかったし、実際に部隊に対してクレームがあったという話も聞いていない。文民統制の本旨は、些末な発言に目くじらを立て、自衛隊を「お利口な組織」にすることではなく、「如何にして部隊を精強にし、他国からの脅威に備えるか」を真剣に考え、「精強で士気旺盛な武力組織」となるように全精力を注ぐことではないだろうか。

近年、一般社会において若者の政治離れが加速しているが、それは自衛隊も例外ではないように感じる。私は、現在のような政治から自衛隊を遠ざけるような流れの中で、現職の自衛官に政治的無関心層が広がることを強く懸念している。それは、国家権力である自衛隊に所属する自衛官こそ、政治に対して敏感であってほしいし、何より防衛の現場における専門家として、政治家に対して適切な意見具申をする役割を担ってほしいからである。我々は、「政治に無関心になることはできても、政治と無関係に生きることはできない」ということを忘れてはならない。

期生会だより

防大13期生 ホームカミングデイ実行委員会

13HCD 実行委員長 牧本 信近(13期・海上)

2012.3.18(日)(予定) 防衛大学校本科第56期生卒業式に併せ、防衛大学校長からホームカミングデイ(HCD)として防衛大学校第13期生が招待されます。若い後輩の門出を祝福激励し我々のルーツを辿って家族も含めた同期の絆を更に強める為、防衛大学校卒業式参列・校内見学・顕彰碑献花式・観閲式参列・よこすか平安閣大懇親会を企画調整実行する“防大13期生ホームカミングデイ実行委員会”を2010.4.1に関東地区在住30名で編成完結しました。

実行委員は、山下輝男(陸)副委員長・内山好夫(空)副委員長・伊関哲三(海)総括部長・宇都宮靖(空)総括副部長・関 芳雄(陸)企画委員・河邊 博(海)企画委員・松浦幸永(海)企画委員・菅原 純(陸)連絡委員・香田好文(陸)連絡委員・小宮哲夫(海)連絡委員・溝下素夫(海)連絡委員・花岡芳孝(空)連絡委員・後藤英二(陸)調整委員・井出 順(海)調整委員・中島正雄(空)調整委員・篠田芳明(陸)写真HP部長・牧田正紀(海)写真HP委員・四ツ家邦紀(空)写真HP委員・鈴木秀典(海)大懇親会部長・大岩勇吉(陸)大懇親会副部長・持田 修(陸)大懇親会委員・古庄幸一(海)大懇親会委員・三橋勝昭(海)大懇親会委員・小田邦博(空)大懇親会委員・津曲義光(空)大懇親会委員・二宮 修(空)大懇親会委員・濱田良昭(海)会計部長・河原井卓(陸)会計委員・城 憲夫(空)会計委員の諸兄です。

今後、実行委員会は、防大同窓会本部・防大同窓会小原台事務局・防衛大学校と周密な調整を実施しつつ、2011年6月に13HCD詳案を概成して家族も含めた13期生の13HCD参加希望事前調査を行ない、13HCD細部要領を詰めた後、2011年10月に13期生へ13HCD案内状を発送します。2012年1月に実行委員会から防大同窓会本部事務局へ13HCD参加者名簿を提出すると、2012年3月に防衛大学校から13HCD参加者へ招待状が発送されます。

なお、実行委員会による円滑な13HCD事前調査・案内状発送および防衛大学校による13HCD招待状発送の為に、自分の住所・電話番号だけでなく、他の同期生の住所・電話番号についても、13期生諸兄は「第13期生会住所録」の整備に御協力ください。

また、防大13期生会ホームページに13HCD関連情報を掲載しますので、御覧ください。

「航空19期生会卒業35周年記念行事」 を盛大に挙行

辻 章嗣(19期・航空)



何故35周年？

同窓会員の皆様、航空19期生会は、去る4月24日(土)に卒業35周年を記念した行事を盛大に挙行いたしました。

この記事をお読みになっている方の中には、何故「35周年を盛大に？」と思われる方も少なくないと思います。

その理由は、防大19期生会では、10年の節目毎に陸海空合同で記念行事を行うことにしている関係から、航空要員の行事として今回は35周年を選んだ次第です。

また、4名の現役自衛官を残し、多くの同期生が自衛隊を退官して第2の人生を送り始めた節目の時期にあることや、年齢的にもまだまだフットワークも軽く、多くの会員が集まることが期待出来ると考えて35周年記念行事を盛大に計画することにしました。

実施に至る経緯

平成21年6月、射場期生会副会長を委員長とする総勢10名から成る「準備委員会」が組織され記念行事の準備を開始しました。この記念行事の主な内容については、毎年4月に実施している年次総会の時期に合わせ、「防衛大学校の研修」と「記念懇親会」を組み合わせることで見解の一致を見ました。

この際、準備委員会の中で議論になったことは、懇親会会場を何処にすべきかということでした。始めのうちは防衛大学校を研修したのちに思い出の地「横須賀」で懇親会を実施する意見が大勢を占めていました。これに対抗する案は、防衛大学校を研修後、交通の便が良い「東京駅周辺」に懇親会会場を設定すると言う意見でした。その後、会場の下見や経費の見積等を進めた結果、より多くの参加者を募りやすい「東京駅周辺」で行うことに決定しました。これが結果的に100名を超える会員とその家族の参加に繋がったように思います。

記念行事の概要

日 時：平成22年4月24日(土)

1300 バスで東京駅を出発、途中観音崎公園散策

1520～1700 防衛大学校研修、終了後バスで移動

1845～2115 平成22年度総会及び記念懇親会

場 所：防衛大学校及び東京プリンスホテル

参加者：航空19期生会会員及びその家族

防衛大学校研修バスツアー

天候不順が続くなか、当日の天気は快晴で風も無く絶好の研修日和になりました。流石、防大卒業生、定刻に東京駅を出発して、一路、防衛大学校を目指しました。途中、心配された交通渋滞も無く予定より早く観音崎公園に到着しました。観音崎公園では、遠くの波間にカッター訓練中の後輩の姿を眺めたり、映画の撮影を記念して作られたゴジラの像を探して海岸の遊歩道を歩いたり、思い思いの一時を過ごしました。

そして、いよいよ防衛大学校に到着し、現地集合の会員を加えて、会員43名、家族26名が参加する研修が開始されました。研修は、休日であるにもかかわらず、わざわざ山口訓練部長のお出迎えを受け、先崎広報専門官を始め学校職員による説明を受けながら本館エントランス、記念講堂、資料館、学生舎と見て回りました。参加した会員は、母校の余りの変貌振りに目を見張りながらも、当時の自分達を思い出しているようでした。また、家族の多くは、防大を訪れるのは初めてであり、充実した施設と恵まれた生活環境に感心している様子でした。途中、本館前では参加者全員による記念撮影を行いました。



本館前で参加者全員の記念写真

本研修に際しましては、土曜日にも係わらず学校関係者の絶大なるご支援とご協力を賜り心から感謝する次第であります。

平成22年度総会

年次総会では、議長の選任に引き続き、21年度の活動状況が報告された後、会計報告が承認されました。次に、会長から22年度役員が指名され、新役員から22年度の活動計画が報告され予定通りに終了しました。



総会の様子

記念懇親会

いよいよ待ちに待った記念懇親会が会員72名、家族34名の参加を得て始まりました。この会の司会は、懇親会の立案及び企画を手がけた武富委員が担当しました。始めに射場実行委員長の開会の辞が行われ、続いて岩崎会長から挨拶がありました。会長挨拶では、この記念行事の経緯と目的の説明があり、参加者が懇親と親睦を一層深めることを要望されました。そして、祝宴に先立ち、志半ばにしてその人生を閉じられた濱本君と秋山君のご冥福を祈って参加者全員が1分間の黙祷を捧げました。

続いて、見事乾杯のくじを引き当てた吉田君の乾杯により、祝宴が開始されました。ビュッフェスタイルで準備されたメニューは、ホテルとの調整によりヘルシーな料理を取り揃え、特に、奥様方には好評を博しました。祝宴も中盤に差し掛かったところで、アトラクションとして懐かしい防大時代の写真と参加者の学生時代と現代の顔写真を較べたスライドが上映されました。すると会場の彼方此方からは笑い声や大きな歓声が巻き起こっていました。



懇親会における歓談風景

本会には、卒業以来35年ぶりに会う仲間や、若い頃に同じ官舎で過ごした奥様同士が顔を合わせるなど、懇親会は時間を忘れて大いに盛り上がりました。あっという間の2時間が過ぎ、最後に全員で学生歌を斉唱し、5年後の卒業40周年記念行事、8年後の防大卒業式におけるホームカミングデーでの再会を誓い、万歳三唱の後に散会となりました。



締めめの万歳三唱

今人生、男盛り

JMAS ラオス代表として

黒川 純一(16期・陸上)



私は、今年6月からJMAS（日本地雷処理を支援する会:自衛官OBが主体となって活躍する認定NPO法人）ラオス代表としてラオスの首都ビエンチャンに赴任しました。ほとんどの日本人にとってこの国はまだまだ未知の国であると思います。ビエンチャンは、人口60万人の街です。緑豊かな、規制により高層建物がない、そして、毎朝街のいたるところで僧侶の托鉢と市民の喜捨の姿があるゆったりとした古い面影を見るような街です。

さて、私も同期の他の例にもれず、平成17年5月に現職自衛官を退職しました。その後、約5年間会社に勤務しましたが、この間、今後の人生はこのままでいいのか？自衛官時代培った経験を活かし何かできないか？自問自答していました。そんな中で、先輩からの誘いによってJMASを手伝うこととなりました。最初は、カンボジア不発弾処理事業を日本において担当し、カンボジアにいまに残っている不発弾の回収・処理についてお手伝いをしました。そして、世界には、紛争が終わった後、常に残る爪痕の一つに不発弾があり、いまだに苦しんでいる人々がいることに認識を新たにしました。また、出てくる不発弾の種類・生産国から当時の紛争の勢力関係の一端を垣間見ることができました。

さて、私も同期の他の例にもれず、平成17年5月に現職自衛官を退職しました。その後、約5年間会社に勤務しましたが、この間、今後の人生はこのままでいいのか？自衛官時代培った経験を活かし何かできないか？自問自答していました。そんな中で、先輩からの誘いによってJMASを手伝うこととなりました。最初は、カンボジア不発弾処理事業を日本において担当し、カンボジアにいまに残っている不発弾の回収・処理についてお手伝いをしました。そして、世界には、紛争が終わった後、常に残る爪痕の一つに不発弾があり、いまだに苦しんでいる人々がいることに認識を新たにしました。また、出てくる不発弾の種類・生産国から当時の紛争の勢力関係の一端を垣間見ることができました。

JMASのラオスとのかかわりについて少し述べたいと思います。JMASは、ラオス不発弾処理事業の準備を平成17年から始め、平成18年から本格的に実施しています。その枠組みは、ラオス労働社会福祉省に所属する不発弾処理機関 UXOLao と協同して、シェンクワン県で JMAS 専門家（元自衛官）を2名配置し不発弾処理を行うとともに不発弾処理技術を移譲するものです。平成22年4月からは、ラオス南部のアッタープー県（専門家1名配置）でも同様の事業を始めています。そのラオスは、1964年から1973年の間、ベトナム戦争当時のホーチミンルートと呼ばれる北ベトナム軍の兵站道路がラオス領内を南北に走っていました。それを米軍は空爆により阻止しようとした。また、この時期ラオス王朝政府軍とパテトラオ（現政権）軍の内戦が勃発しラオス王朝政府軍を支援する米軍の空爆がありました。これらによる爆弾の投下量は、58万発と言われています。この中にはクラスター爆弾も数多く含まれクラスター弾の子

弾（ボンビー）は、2.7億個投下され、その約3割の8000万発が不発弾として残っており、現在も死傷者が絶えません。これが農作業を制限するなど住民の活動を制限しています。これが巡って住民の貧困から抜け出せない要因の一つとなっています。このような状態の中で、JMASは、UXOLaoと協同して不発弾の処理に当たっています。このクラスター弾に関し、クラスター爆弾禁止条約が平成22年8月1日に発効しました。これを受けて平成22年11月にラオスビエンチャンで第1回締約国会議が開催されることとなりました。そしてこの間の視察場所としてクラスター爆弾での汚染が一番厳しいシェンクワン県が選ばれました。県ではクラスター弾（ボンビー）の処理は年間約1万個を数えます。ボンビーは、信管が内蔵されており、外側から安全状態が確認できず危険なため発見されればその場で爆破処理します。日々安全に神経を研ぎ澄ましなが作業を続けています。



右下のクラスター弾子弾（ボンビー）の上にTNT化薬を乗せ、



更に土嚢を乗せて爆破処理をしている。

この専門家の活動を円滑に出来るようにするためラオス代表は、ビエンチャンにおいて、東京のJMAS本部との連絡や、日本大使館、ラオス政府の関係部署などと日々調整に明け暮れています。一見、高尚な業務に見えます

が、現地人を雇用し、慣れない言語と苦闘しながら、事業計画の作成・調整、経費の執行、清算、報告書作成から始まり、イベントには、手づくりの看板やポスターを作り、また、専門家と一緒に教育資料の収集、さらに総務・人事に関する事項などなど・・・自衛官時代、様々な職務をこなしてきましたが、やってきた事が全て役に立っていると言っても過言ではありません。他に人がいるわけではなく業務の発信源との位置付けから、時間に追われ、土・日にしゅっちゅうずれ込んでいますが、特に苦になることもなく、淡々とこなしています。

何かの形で、誰かのためになっている、一つの生きるあかしが感じられ、きつい中でも充実したものがあります。

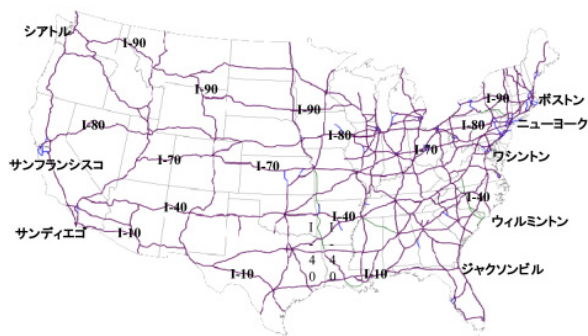
防大の学生の頃、アジア研究同好会に所属し、東南アジアの共産圏と自由主義圏のつばぜり合いの様子を垣間見ていましたが、その場所に今いると思うと不思議な感じがします。

米国横断ハイウェイ・グランドスラム

基礎工学Ⅱ 短艇委員会
香田 洋二(16期・海上)



私は現役中に3回の長期米国滞在を経験しています。1975～76年の対空ミサイルと軍用デジタルコンピュータ課程に留学した時に学校の所在地が西海岸のサンディエゴと東海岸のノーフォークであり、学校間移動を車でしました。米国で一番南にあるインターステイト・ハイウェイ10号線(I-10)を使った10日間の横断でした。カリフォルニア、ニューメキシコ、テキサス、ルイジアナ、フロリダ州などを通過しながら米国の巨大さ、州や地域ごとの生活環境の差を感じさせられながら、日本では映画で有名なアラモの砦など各地の名所にも立ち寄りました。この時は結婚直後の貧乏2尉で、目的地であるダムネック砲術学校に無事到着し「ホット」したことが強く印象に残っています。



米国横断インターステイト図

次に1982～84年の2年間アナポリスの米海軍兵学校の連絡官として勤務しました。83年夏に当時5歳と3歳の息子に「アメリカを見せよう」と思い立ち、夏季訓練の予定をやりくりして23日間で米国の中央部を横断するI-70とI-40を往復しました。ボルティモア(I-70の起点)発で西航、途中、沿線の空軍士官学校(コロラドスプリングス)、イエローストーン等に立ち寄りながらのI-70のドライブでした。ユタ州南西部で70号線は終わりますが、ここからソルトレイクシティに北上しI-80に合流、サンフランシスコに到着です。このルートはセントルイス、カンザスシティ、デンバーと日本でもおなじみの都市が並んでいます。広大な米国の穀倉地帯、そしてロッキー山脈は感動の連続でした。その後、太平洋岸を南下しロスアンジェルス着、サンタモニカから東に一直線のI-40をテスバレー、グランドキャニオンなどの国立公園に立ち寄りながら終点のノースカロライナ州ウィルミントン着の旅でした。途中、「立ち寄り」のない日は1日700マイルを稼ぎ、名所では2泊といったリズムを組みました。今32と30歳の息子たちは写真でのみ旅行のことは知っていますが記憶は全くないとのこと。残念!

この時に北部のI-80と90の往復で米国横断ハイウェイ全線制覇ということは気付きましたが「次の機会はないだろう」と覚悟しました。この為2人の息子たちに「将来君たちが米国居住をすることがあれば両親を80と90号線横断の旅に招待してほしい」旨の話はしましたが、内心は諦めていました。

次は米海軍大学校への留学でしたが、滞在期間が1年弱と短く論文作成に追われることが予測されたことから大陸横断は当初から計画しませんでした。

我々夫婦も「本当に終わり」と思っていたところ一昨年夏の退職後、突然ハーバード大研究員(2年)の話があり、内心「世の中、何が起るか本当に分からない」と思いながら、神妙な顔でこの話を受けたところでした。

こちらに来てからは研究員としての論文の発表や出版、セミナーの開催、他大学での講演・講義等も本当に積極的にこなしています。ただ昨年夏の到着直後から、心の中は「来年の夏はやるぞ」との心意気で一杯でした。夫婦での免許の取得、車の購入、資料の収集など暇をみて準備を重ねました。免許の取得も今回4回目、コンピュータ化のおかげか筆記試験は簡単になっています。実技は日本と比較はできませんが縦列駐車や3ポイントターンなど相当に厳しくなっていました。車は整備性や燃費からプリウスの新車としました。準備も完了し去る8月11日早朝にI-90の始点であるボストン発、西航しナイアガラ経由2日目の午後シカゴに到着し2泊しました。当地は初めてで、シカゴピザの有名店では45分行列しようやく名物にありつき、また「海と空の週間」であり米海軍の曲技飛行チーム「ブルーエンジェルス」の展示飛行も間近で見えることもできました。次の2日間はひたすらドライブで、翌日からは映画「未知との遭遇」のロケ地で有名なデビルズタワーをはじめイエロー

ストーン、グランドティートンなど6ヶ所の国立公園を回りました。この後I-90に復帰して西航を継続、ロッキー山脈を超えた途端に目前に開けたコロンビア台地の雄大さに圧倒されながら終点シアトルに到着しました。同地で現役時からの親友である前在日米海軍司令官ケリー少将宅に3泊、米海大時代の友人宅に1泊した後、周辺の国立公園を経て太平洋岸を南下しサンフランシスコに到着しました。同地に2泊した後セコイア・キングスカニオン、ヨセミテの国立公園で3泊4日を過ごしました。両地は米国でも有数の人気スポットだけのこととはあり新鮮な感動の連続でした。この後ヨセミテの北側のタイオガロードという隠れた名所を走り抜け、ギャンプルの州ネバダを一気に北上しI-80に乗りソルトレイクシティまで東航しました。この後ロッキーマウンテン国立公園に立ち寄りましたが、舗装道路としては世界最高地点という海拔3,200m地点を通過しました。その途中、距離にして20m程の区間は両側が断崖で誤れば地獄の底まで真っ逆さまというところがあり命の縮む思いもしました。晴天ながら20mを超える強風の中、約1,500mの高度差を数時間で上り下りする醍醐味は正に米国でしか体験できない恵みでしょう。その後はI-80をひたすら東へ3日間ドライブし9月3日夕刻ケンブリッジの自宅に帰着しました。総走行距離8427.9マイル(13,560km)、24日間の旅でした。

間もなく61才ということもあり多くの米国人の友人からも「無謀」あるいは「何が楽しくて？」という声もありました。私にとってはこのチャレンジこそが正に「今人生男ざかり（妻も全部一緒でしたので女ざかりも追加させてください）」の心意気でした。最も良かったことは30代半ばから目標にしていた「米国横断ハイウェイのグランドスラム」を25年かけて達成できたことです。まだまだ人生何でもできそうです。（無理をしない範囲で!!）

— 終わり —

今人生、男盛り

横田 治(16期・航空)

先日、数年会っていなかった同期に、市ヶ谷の防衛省でばったり出会った。お互いに歳をとり、白髪が目立つが、気持ちだけは出会った頃と同じように思えた。

彼とは学生時代、同室だった。あの頃の彼の趣味は「物書き」！ 私は「写真」と「盆栽」（鉢植えと言った方がいいかな？ 盆栽家に失礼だから!）。

ちょっと、変な組合せだが、気が合った。少し（？）前だが、私はゴールデンレトリバーという犬を飼っていた。彼も同じ犬種を飼っていた。ただ、この点だけで、んっ、やっぱり気が合っていると私が勝手に思っているだけなのだが…。

彼は大手電機メーカー勤務。今回は顧問の名刺の他に2枚の名刺をくれた。という、私も2枚の名刺を差し出した。今、私は防衛省のOBばかり60名程の会社の代表をしている。この原稿依頼も、会社の代表をしているということで、他の人と違った意見を期待されての依頼だと推測するが、結果は、期待はずれに終わると思う。

代表の仕事は、いろいろな情報を自分なりに分析し、今をどうするか、将来をどうするかなど、決心しなくてはいけないことが多いので、いろんな情報を必要とする。その点、少しぐらいは書けることが多いと思うが、どうせ書くなら、思いっきり、普通のことを書きたい。

「今人生、男盛り」をテーマに書こうとすると、少し外れるかもしれないが、男も女も生きている間は、男盛りであり、女盛りが理想だと思う。やる気満々、元気一杯で、ずっといたい。「盛り」でないと人生はつまらないものになってしまうのではないかと心配する。強い意志はなくても、ある程度意思（やる気）がないと他人の意で自分が動いてしまうことになり、私からみるとつまらない人生じゃないかなと感じる。でも、他人の言いなりが自分を満足させるのであれば、それはそれでいいことだと思う。人生、自己満足することが一番と思うからである。私は、日頃、「趣味は自己満足! 楽しくないのは趣味じゃない!」と言っているの、趣味について書いてみる。

私の趣味は、「陶芸」と「BONSAI」（「盆栽」とは、程遠く、「鉢植え」に近いのと私のブログを外国人に見せたいから）と「野菜造り」と「ネイチャリング」（年に数回）など。昔、やっていた写真も入れたいのだが、最近、入選などしている奥さんから硬く遠慮するように言われているので、やらない。

まず、最初に「陶芸」ですが、最初の任地で先任に勧められて、陶芸を始めた。もう40年ぐらいしている。20年程前から、知人の工房に場所を移し、その窯が大きいので、教室を作り、活動している。私が通う陶芸教室の生徒には、「陶芸家になろうなんて思わず、楽しく自己満足しなさい。」と言っている。でも、言うことを聞く生徒は皆無に近いが、… 陶芸は指先を使うのと創造するので、ボケ防止には、もってこいの趣味だと思う。趣味のない人にはお薦めする。自分で作った湯呑みやコーヒーカップでお茶などする楽しみも増える。

次に、「BONSAI（鉢植え）」ですが、盆栽というときと畏れ多いそうだが、鉢植えだと気楽にできる雰囲気になるのでは？ 長生きして、盆栽にまで到達すれば拍手ものです。始めるには、「植物が枯れてもいい!」と思ってやらないと趣味にならない。「すぐに枯らすから、」という人には、発想変えて、「枯らしてもいいや!」と挑戦して欲しい。公園で櫟やもみじの種を拾って蒔いておくと翌春には素晴らしい鉢植えが見られます。道端の草なども鉢に植えたら、なかなかの風景です。何年前か、ヘビイチゴを少し背丈のある鉢に植えたら、可愛い黄色の花や赤い実をつけて、楽しませてもらえた。陶芸で自作の鉢に植えたりしたら、満足度もアップすること間違いなしです。

「野菜作り」については、野菜造りで気が付いたこと。野菜の出来具合の違いを見て、手を加えればいいものができると感じた。もっと子育てにも力を入れれば良かったかな?と…。その他のことは、プロの方もおりますので、省略します。



BONSAI (鉢植え) を手に

「ネイチャリング」。自然の中を歩き、いい空気を吸って、観察して、四季を感じると元気になります。日頃のストレスを解消するには、一番、簡単な趣味だと思っています。山登りなどもいいのですが、思いついたら、近くの森などに出かけて行く。溪流釣りや茸狩りなども含めて、外に出ることをお勧めします。

今の仕事は、入札価格の決定や仕事の進捗状況の把握、人の採用、資金繰りなど、結構、ハードで気が抜けず、疲れます。そんな時、ストレス解消に趣味が一番。毎朝、早く起き（遅い?!自分では早いはず?）、畑仕事をしてから朝食を摂り、仕事モードに切り替える。夜遅くまで仕事をすることもあります。最後にブログをチェックすることで仕事モードを終わらす。土日は、陶芸など自分の好きな趣味をして過ごす。第2の人生（仕事）が、まだ少し残っていますが、近い将来、サンデー毎日になる第3の人生が楽しみです。

忘れていましたが、去年の三好先輩のブログに書いてあることを参考にすると、パートナーの意見を「一番」にすると丸く収まること間違いなしです。パートナーを大事にしましょう!

ちなみに、私のブログは、「楽天ブログ」「おーちゃん17」で入れます。大したことは書いていません。「元気です!」と発信しているだけです。

最後に、小原台で人の繋がりができたことに感謝するとともに、この繋がりを維持・強化しようと努力されている多くの方々に敬意を表します。



防大54期生に聞く

防大54期生に聞く



第3候補生隊第4区隊34番

陸曹長 山田 俊介

時が過ぎるのは早いもので、幹部候補生学校に入校して半年が経ちました。あと2カ月半ほどで普通科連隊付として全国各地の部隊へ赴任していくわけですが、部隊での勤務を心待ちにする気持ちと、自分が部隊に必要とされる存在になれるのか不安に思う気持ちの両方が入り混じっているのが正直な現状です。まだ総合訓練や修了試験等、様々な行事を残していますが、半年間の幹部候補生学校の生活を振り返って、防大生活で得られたこと、防大でやっておけば良かったことを紹介したいと思います。

まず、防大4年間で得たものの1つは、先行的な思考力です。これは、1学年時や2学年のカッター訓練時の忙しい生活を送る中で自然と身につけているものです。実際、3月末の着校時はカッター訓練前を思い出させるような忙しさでした。着校すると、一般大卒の候補生とバディを組むことになるわけですが、防大での1学年着校時と同じような感じです。次に何をするか、優先順位は何かを先行的に考えることで時間の余裕を作っていく必要がありますが、1度そのような忙しい生活を送ったことが大きなアドバンテージになりました。

2つ目は「切り替え」の早さです。幹候校は教育期間に比べて教育内容が多く、防大以上に色々な行事があります。この原稿を書いているのは10月上旬ですが、課目試験、武装障害走、卒業時の体力検定という3つの行事への準備を同時並行で行っています。防大でも学生舎、校友会、勉学という3本柱があったと思いますが、今思えば場面ごとに頭を切り替えていく訓練になっていました。これから幹部として勤務していく際、多正面の仕事が舞い込んでくると聞きます。その中でどのように切り替えて仕事に当たれるかが、今後の自衛隊生活に必要な不可欠なものとなってくると思います。

次に、防大でやっておけば良かったことですが、山のようにあります。なので、その中の幾つかを挙げていきたいと思います。まず1つ目は、積極性です。防大在学中を振り返ってみると、特に学生舎で人の陰に隠れて生活していた記憶しかありません。よく「沈黙は金、雄

弁は銀」と言われますが、現在の幹候校生活では逆に積極性が求められます。授業での質問や意見発表などの機会が沢山与えられ、人前で話す能力、考えをまとめて人に話すという能力が必須になります。防大時代自分の好きなことしかしない生活をしていた私には、かなり苦痛を伴うものでした。あわせて、今思えば精神面での成長も、もう少し出来たように感じています。幹候校では戦術等の知識面と同じ位精神面の資質育成が行われます。その資質は責任感や使命感、品性といった人間性に係わるものが多く、自衛官というよりも一般社会人として当然のモラルが要求されます。

最後に、陸、海、空のどれにも共通して言えることは、同期の絆を大切にしたいということです。防大で得た繋がりや卒業して陸・海・空に分かれてからも絶えることはありません。また、幹候校に着校してからは、防大時代に話したこともない同期と同じ区隊になります。しかし、防大で同じ時間をすごしたこと、同じバックグラウンドを持っていることは、信頼関係を作っていくうえで非常に大きな土台となります。

防大4年生も、11月を過ぎると否応無しに幹候校を意識し始めると思います。自分もそうでした。再び1年生のような生活を送ることになるのでは?という嫌な思いがあったのも事実です。実際幹候校は防大ほど楽な場所ではありません。

しかし、自分から進んで飛び込んでいけば、沢山のものを得られる所でもあります。怖がらず、後ろ向きにならず、飛び込んできてください。

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

平成22年10月



幹部候補生学校に入校して

幹部候補生 海曹長
垣内 隼斗

今年3月に我々第61期一般幹部候補生（防衛大学校54期）が海上自衛隊幹部候補生学校に着校してから6ヶ月が経った。6ヶ月と言ってもあっという間で、ここ候校での生活が残り半分となり、このままで初級幹部自衛官としての責任を本当に果たしていけるのか不安が募るばかり、というのが本音である。しかし、候校で学んできたこと、学んでいることは、徐々にではあるが我々の身に付きつつもある。

候校は「修養の場」である。毎日一瞬たりとも気を抜く間の無い生活であり、全ての教官・職員から候補生の一挙手一投足に至るまで厳しい指導を受ける。もちろんそれは、候補生を幹部海上自衛官として一人前に育てるためであり、私達候補生はその指導に応えるべく日々努力している。

また、この指導により、個人のレベルアップばかりでなく、候補生が丸となり、協力し合う、団体生活により全体のレベルアップも図られている。自分のことだけでなく、周りの同期を助ける「思いやり」の心は、極限状態においても保たれていなければならない。それは、船乗りとしてはもちろんであるが、幹部自衛官として、同僚や部下を持つ身としてなくてはならない素養の一つであると言える。極限状態に限りなく近いと言える候校の生活において、この「思いやり」の心は防大の時以上に当たり前と思えるほど身につけてきたように思う。

さらに、候校においては日々の生活のみでなく、様々な行事が数多く行われる。年間を通して行われる総短艇競技をはじめ、5月の短艇競技、8月の水泳競技などの分隊対抗で行われる各種競技や、8マイル（約15キロメートル）の距離を泳ぐ遠泳訓練や宮島周辺にて行われる帆走巡航・幕営訓練など多種多様な訓練・行事がある。

これらの中でも特に、各種競技については各分隊ともに事前に周到な準備・訓練を行い、優勝を目指してまさに死力を尽くして戦うものである。これは、1年間という候校での教育期間においてモチベーションを維持するのに一役買っているばかりでなく、個人の気力・体力を向上させ、団結心を養うための有効な手段である。また、何事においても分隊の名誉をかけて「勝つ」ことは、我々自衛官にとっては必要なことだということを否応なく思い知らせてくれる。いくつかの競技が終わった現在、勝った喜び、負けた悔しさは候補生全員の胸に強く刻み込まれているものであり、次の競技への強い意気込み、さらには「勝利への執念」という自衛官としての持つべ

き重要な資質を培うのに役立っている。

もちろん、単に「勝つ」と言っても、そこには十分な準備とそれに対する綿密な計画も必要であるが、それ以上に分隊総員のベクトルを同じ方向に向けることが必要である。個々の能力がいくら優れていようと分隊としての総合力に劣っているではこれら各種競技に勝利することは不可能と言っても過言ではない。この点についても、候校においてはやはり個人の持てる力を結集した上での団結力が大いに試されていると言える。

このように、毎日忙しい中にもやりがいを感じ、日々生活を送っているが、候校を卒業して遠洋練習航海で技能を磨いた後、一人前の幹部自衛官として部隊に足を踏み入れる日に思いを馳せない日はない。これからは、候校の教官のような立派な幹部自衛官を一つの目標として、候補生生活で得たことを将来の自分の糧とできるようしっかりと積み重ねていく所存である。候校での生活は残り半分となったが、それに続く遠洋練習航海の半年間も含め、自分に甘えず、第61期一般幹部候補生の同期生と互いに切磋琢磨しあい、一日一日を大切に精進していきたい。



日米候補生交換見学行事



分隊点検

防大55期生以下に伝えたいこと



一般幹部候補生 空曹長
岩田 寛士

防大55期生以下の皆さん、お久しぶりです。お元気ですか？皆さんと同じく勉学、学生舎、校友会に汗を流していたことを懐かしく思います。

今年の3月22日に防大を卒業し、3月24日にごこ航空自衛隊幹部候補生学校（以下、本校とする。）に着校してから早5か月が過ぎました。航空自衛官の初級幹部を育成する本校での生活について少し紹介したいと思います。

パイロットへの憧れを抱きながら本校に入校し、現在まで航空自衛隊の初級幹部になるための基礎を叩き込まれる日々を送っています。環境の変化に戸惑い、区隊長（防大でいう小隊指導官。）からの“熱い指導”からここが「修練の場」であることを実感し、自分の甘さと弱さを痛感する日々を送っています。本校の学生隊は、大きくB課程（防大出身）とU課程（一般大卒）、I課程（部内出身）の3つに分けられます。それぞれの存在意義は、役割の違いにあると考えます。I課程はこれまでの部隊経験をもとにした運営、指揮を求められていると考えます。彼らは、その経験から他課程を引っ張るとともに、部隊の実情、裏話等を教えてくれる兄貴的な存在です。U課程に関しては、航空自衛官としての基礎的教育であると考えます。彼らは、3月末に入校し、自衛隊という世界に初めて飛び込み、右も左も分らない状態でスタートしました。基本動作等の自衛隊の諸制式の動作に戸惑い、体力的にもついていけない者も多く、私の防大入校時に感じた心境と同じであったでしょう。しかし、彼らは確実に成長し、今はB・I課程と同じように生活しています。では我々B課程は？？ 私は、リーダーシップの発揮であると考えます。自衛隊に関する知識や経験においてI課程に劣りますが、それ以外でリーダーシップを発揮する場面が多いと考えます。例えば、最初に中隊の方針や統制事項を打ち出したりするなどして率先する場面が非常に多いと思います。防大時代に学生舎や校友会で培った経験を基に、競技会（駅伝、水泳大会等）等においてもリーダーシップを発揮しなければなりません。卒業後、すぐに部下を指揮する立場にある我々には、そのリーダーシップを発揮することが強く求められているのです。

ここまで長々と本校について述べてきましたが、本校での生活を通じて感じたことの中で、皆さんに伝えたいことを述べたいと思います。

①全ては気持ちから

何事にも気持ちが大事であること。気持ちで負けたら、何もできません。本校での当初からの“熱い指導”に怯むことはありましたが、「全ては自分のために」と前向きに考えていました。また、本校のカリキュラムが過密で次から次へと新しい行事等があり、その準備も忙しく、訓練も防大とは大きく違い、精神を鍛練するという意味においても自分を大きく成長させてくれる環境です。

特に、今までの訓練で一番の思い出である60km徒歩行進でこの言葉が、自信から確信に変わりました。訓練前には、60kmは人間が一日で歩く距離ではないと思い、不安の気持ちがありました。しかし、訓練終了後、今までの人生の中で一番の達成感を感じたといっても過言ではありませんでした。「全ては気持ちから」どんなに過酷な状況下でも決して気持ちを切らさず、最後まで目標に向かって突き進めば必ずいい結果が生まれ、自分の成長につながると考えます。

②人間関係を大切に

経験豊かなI課程と知識に優れたU課程との交流により様々な識見を深めることができ、十人十色の同期の自衛官とともに生活していると毎日が楽しい発見の連続です。また、区隊長方の自衛官はもとより一社会人としてのその姿勢には尊敬の念に値し、幹部自衛官としての理想像を映し出してくれます。本校での豊かな人間関係により感化されることが多く、航空自衛隊という組織の素晴らしさを毎日感じるができます。今は防大生活で築いた人間関係（特に同期）を大事にして下さい。

③日々、感謝の気持ちを

私は、家族、友人、同期、防大の指導官など今までに多くの人に支えられ、自分を成長させてくれたと感じています。人間という生き物は自分中心で物事を考えがちで、周りが見えなくなることがよくあります。感謝の気持ちを抱いた時、自分の立場に気づき、今の自分を客観的に分析することで、自己研鑽する姿勢が生まれます。本校で感謝する気持ちを常に持ち、恩返しするという気持ちをもって何事にも全力で頑張ってください。

以上の3点を挙げましたが、これらはあくまで私の私見なので参考程度にしてもらってかまいません。しかし、陸海空の幹候校に入校してからは防大在校時と違った印象、考えを抱くと思います。それによって、自分の論理的な思考が変わり、違った観点から物事を考える機会に出会うと思います。そして陸海空幹候校が自衛官としての自分が成長できる絶好の機会であることが明確に理解できるはずです。その時に、自分を見つめ直し、自己研鑽につながるきっかけにしてください。最後になりましたが、今後益々の防大の発展と皆さんのご健勝を祈念して私の挨拶とさせていただきます。防大のみんな、頑張ってくださいね!!

幹部候補生学校の所感と決意



一般幹部候補生 空曹長
金澤 慧人

先輩同窓生、同期、後輩諸官の皆様におかれましては世界各地に各々の任務に邁進されていることと存じます。

私は22年3月に本科学生を卒業した54期生の金澤候補生と申します。学生時代、防大同窓会からの多大なご支援を賜りまして陸上、海上、航空自衛隊の道に進んだ54期生を代表しましてこの場を借りて厚く御礼申し上げます。卒業生となった今、現役学生教育の更なる発展のため防大同窓会の運営に微力ながら協力させていただき所存であります。

学生時代拝見していた「小原台だより」にまさか自分が投稿するとは夢にも思っていませんでした。投稿することはとても良き経験になりますが、諸先輩方をご覧になるため緊張しながら執筆しております。良い文書を書かなければならない責任感に圧迫されつつも、皆様に喜んで頂ける記事ということで幹部候補生学校での課程履修にあたっての率直な決意について述べさせていただきます。

上級生に指導されない日はない一年生、上級生の目に気にしながら1年生を指導する2年生、自由奔放な3年生を無事に終えた金澤候補生も4年生では一国の主を演じさせていただきました。幹部候補生学校への着隊日、「早く幹候校に行きたい。」と強がりを言っていた金澤候補生は区隊長室での着隊申告で大きな挫折を味わうことになりました。およそ4年ぶりに指導された入室要領、教練動作及び言葉遣いを今一度反省し新たな気持ちで入校式を迎えました。

幹部候補生学校の一日は時間に追われ、計画的に物事を進めなければ必ずどこかにボロが出ます。陸上及び海上の幹部候補生学校と異なり課外には自習時間はありません。しかし、自主性を重んじることから各種競技会に向けた練成訓練、徒手格闘の自主練成、訓練や行事の運営のための会議、中区隊の係学生等自分達で計画実践するためやることは山のようにありました。

また、恥ずかしながら幹部候補生学校での生活に慣れていわゆる「中弛み」をした時期もありました。もちろん区隊長方には見抜かれて熱い熱いもの凄く熱い指導を受けることになりましたが、心の底まで反省し、そして良い思い出にもなりました。

60km徒歩行進訓練や基地警備を行う総合訓練においては、指揮幕僚活動を学ぶとともに、気力及び体力がどれだけ発揮できるかを知ることができました。訓練を通じて、我々の有する能力は何が通じて、何が不足しているのかを個々に認識することができ、これからの自己研

鑽を決意する良き機会とすることができました。

体を動かすだけでなく、教育部での授業も多く行われました。防大で得た知識を航空自衛隊に更に特化した課目は興味深いですが難しく、同期での情報の共有や切磋琢磨しながら勉学に励むことができました。また、区隊長の目から離れる座学は我々学生にとって安らぎの時間であったことは否定しません。

我々航空自衛隊幹部候補生は9月末に卒業し、奈良の地を離れて部隊に赴任します。防大では4年間、幹部候補生学校では半年の教育を通じて幹部とは如何なるものであるかをびっしり叩き込まれましたが、部隊を見たことは少なく不安な側面もありました。しかし、我々は長い期間、国民を初め多くの方々から支援を受けながら教育を受け、その集大成とも言える幹部候補生学校でも全力で取り組んで参りました。我々は誇りと自信をもってこの不安を払拭するとともに、これから立ち向かうであろう困難や苦境に対しても、鍛えた気力及び体力で必ずや克服してみせる所存であります。

国家の存亡に直接関わる日本国の安全保障と軍事分野のプロフェッショナルとして、政治を支えていくのは防衛大学校卒業生の責務です。将来的に我々には重い責任がのしかかるからこそ若い時期から多大な経費を掛けてまで国家は期待するのです。我々が自衛隊の中核で働く数十年には世界の情勢がどうなっているかは見当が付きません。ただ1つ言えることは、赴任先で与えられる任務を全うし、自らの資質及び能力の向上に務め、部隊の精強化を図ることが将来自衛隊の中核を担う者としての相応しい人物形成に繋がることであると思います。

今まさに我々は部隊へと羽ばたきます。先輩同窓生におかれましては、これまでに引き続き叱咤激励の程をよろしくお願い申し上げます。また、後輩諸官においては、まだ見えぬ将来に不安を抱いているかもしれませんが、精一杯今の生活をこなしていくことで必ず道は開けると一言アドバイスをしておきたいと思います。最後になりましたが、皆様方の更なるご発展を祈念致します。



60km徒歩行進訓練

支部だより

桜華会の活動状況

桜華会事務局長 吉田ゆかり(40期・航空)



明けましておめでとうございます。
同窓会会員の皆様におかれましては、
益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。
桜華会の活動状況について、紹介させていただきます。

この度、桜華会は、防衛大学校同窓会創設50周年記念事業として、「防衛大学校に在学中の女子学生との懇談会」を開催させていただくことになりました。桜華会は、「会員相互の親睦、相互研鑽」だけではなく、「防衛大学校女子学生の充実・発展に寄与する」ことも目的としておりますので、今回、このような事業を計画しました。平成19年2月に本会が発会し、その後、なかなか大きな行事（事業）を実施することが出来なかったのですが、今回やっとこのような形で開催することが出来る運びとなり、大変嬉しく思っています。

防衛大学校に初めて女子学生が入校し、平成23年度には女子学生の20期生が入校することになります。また、平成23年度末、桜華会は発会5周年を迎えることとなり、双方にとって節目の年であります。

一方で、「仕事」、「結婚」、「出産」、「育児」などの悩みは、時代は経っても変わらないものであり、在学中の女子学生にとっても、将来の不安も尽きないことでしょう。しかし、現在、陸・海・空自衛隊には、防衛大学校卒業の女性自衛官は200名を越え、様々な職場で活躍しています。人生色々な選択肢がある中で、それぞれの生き方を選択し、様々なところで生きる先輩たちの経験等から得るものも色々あるかと思います。もちろん、それは、現役の女性自衛官同士でもいえることです。

防衛大学校女子学生、そして、桜華会会員にとって、この懇談会が、それぞれの経験等を共有し、少しでも色々な不安等が和らげるような機会になればと思っています。

なお、この場をかりてご紹介させていただきますが、平成24年2月に予定しております「桜華会5周年記念行事」の準備委員会の役員は、

○ 準備委員長 金野 浩子(40期・航空)(現 防衛大学校勤務)

であります。今後、桜華会事務局とも緊密な連携の下、5周年記念行事準備も併せて進めてまいりたいと思います。

引き続き、防衛大学校同窓会の皆様のご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

【防衛大学校同窓会50周年に伴う桜華会の活動計画】

「防衛大学校女子学生と桜華会会員との懇談会の実施」

- 1 期日
23.1.15 (土)
- 2 場所
品川プリンスホテル メインタワー宴会場
- 3 実施内容及び時間
1600～1700 桜華会総会及び講演会
1700～1900 防衛大学校現役女子学生と桜華会会員との懇談会

*会員皆様へのご案内は、桜華会期別幹事を通じて、ご連絡させていただいておりますが、連絡が届いてない方がいらっしゃいましたら、ご一報(nda_woman_oukakai@yahoo.co.jp)お願いいたします。一人でも多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。

(航空幕僚監部防衛課)



防衛大学校同窓会創立50周年記念事業の紹介並びに記念行事の案内について

1 はじめに

防大同窓会は、昭和36年1月小原台で第1期生志摩篤初代会長のもとに創設され、今年同窓会創立50周年を迎えます。

そこで、下記のとおり「記念事業」の紹介を致します。本記念事業では、記念講演や祝賀式典（記念式典・祝賀懇親会）を計画しておりますので、多くの同窓生の参加をお願い致します。

2 記念事業の紹介並びに記念行事の案内

記念事業は、同窓会自体事業と母校支援事業に区分し、自体事業は、広く会員相互の絆を強化し、同窓会の目的を新たに自覚し士気の高揚を図るとともに、地域支部等の活性化に寄与することを目的として、平成22年度及び23年度に実施します。また、母校支援事業は防衛大学校の充実発展に、直接・間接的に寄与することを目的として、防大創立60周年記念事業（平成24年11月予定）計画に緊密に連携し、その進捗状況に応じて実施することとしております。

(1) 自体事業

ア 記念行事

日時：平成23年3月13日（日）16：00～19：45
場所：明治記念館（JR中央・総武線「信濃町駅」下車徒歩3分）

(ア) 記念講演：16：00～17：30

- 講師：藤原正彦氏、演題：「日本のこれから」
- 記念講演に限り、同窓生1人につき1名の同伴が可能（聴講料は無料）
（同封の返信用はがきにその旨を明記してください。）

(イ) 祝賀式典：17：45～19：45

- 記念式典（17：45～18：15）
来賓挨拶、祝電披露、感謝状贈呈（8個団体・個人）、同窓会旗及び表象デザインの紹介等
- 祝賀懇親会（18：15～19：45）
歓談、学生歌斉唱等（懇親会費：5,000円）

(ウ) 出欠の回答要領

- 要 領
出席の方は、同封の返信ハガキにて通知して下さい。
なお、事前の調査で既に出席の通知をいただいた方（同封の「50周年記念行事出席者一覧表」にて再度ご確認ください。通知をいただいた方にのみ同封しております。）も、お手をかけて誠に申し訳ありませんが、返信ハガキでの回答を宜しく願います。
- 期 限
平成23年1月20日（日）必着でお願いします。

イ 同窓会表象・同窓会旗の制定

50周年記念の節目に、団結の強化と士気の高揚を図ることを目的とし、同窓会表象と同窓会旗を制定します。会旗については、全支部に1枚を配布します。

ウ 「小原台だより」特集号の発刊

同窓会発展の歴史や同窓生の業績を顧み、将来に対する決意を新たにするとともに、会員相互の絆を強化することを目的とし、従来の「小原台だより」の内容に、50周年記念事業及び母校支援事業関連の記事を追加掲載します。（特集号の発刊は、平成24年1月及び平成25年1月）

エ 歴代校長の式辞集の作成

歴代校長の式辞を集大成し、広く同窓生に閲覧を可能にすることにより、防衛大学校創設の初心を顧み、自学研さんの糧とすることを目的とし、歴代校長の入校式・卒業式における式辞をホームページに掲載します。

オ 同窓会業務史の整備

同窓会の歴史を確実に記録し、将来の充実発展に資することを目的とし、業務史を整理します。同窓会本部事務局が主体となりますが、各期生会・地区支部等の協力をお願いします。時期は平成21年度以降逐次実施し、「防大同窓会50年の歩み」を「小原台だより」（平成24年1月発刊）に掲載するとともに、50周年記念行事において参加者に配布します。

(2) 地域支部支援事業

同窓会が一体となって50周年を祝賀し、団結を強化することを目的として、地域支部等が企画する記念事業を支援します。事業は各地域支部等が主体となって実施し、必要に応じ各種支援及び本部役員等の派遣を実施します。
時期は平成22年度及び平成23年度中に各地域支部等の計画により実施します。

(3) 母校支援事業

防衛大学校開校60周年の記念事業に連携し、記念品（絵画その他）を寄贈します。
寄贈物は防衛大学校の要望を勘案し、同窓会が選定することとします。時期は平成24年度を基準とします。
なお、『防衛の務め』復刻事業支援については、平成21年度末に「防衛の務め」復刻版を約1,200部購入し、同窓会各支部等、防衛大学校及び各自衛隊等に配布いたしました。

なお、記念行事に先立ち、今年度の代議員会を3月13日（日）13：15～15：40、明治記念館（曙1）で予定しております。代議員の皆様には、別途ご案内いたしておりますが、出席いただきますように宜しく願います。

防衛大学校同窓会機関誌「小原台だより」に関するアンケート調査

現在同窓会会員の皆様に配布しております機関誌「小原台だより」は、誌面の活性化等に関し皆様方の多大なご支援・ご協力のお陰を持ちまして、今年度で既に第18号の発刊を迎えることができました。

既にご案内のとおり、皆様に冊子として配布しております「小原台だより」は、同時に防衛大学校同窓会ホームページ（以下「同窓会HP」という。）（<http://www.bodaidsk.com/>）にPDFファイルとして閲覧できるようになっております。

現在同窓会本部におきましては、昨今の省資源化、経費の節約等の傾向に鑑み、今後の「小原台だより」の配布部数の縮減について検討致しております。

インターネットの普及に伴い、大多数の方々がパソコンから同窓会HPにアクセスできるようになるとともに、同窓会HPに掲載しています「小原台だより」のPDF版は、カラー写真でもあり、冊子同様十分に読んで楽しめるものとなっております。

しかしながら、やはり冊子での「小原台だより」をご要望の方々もおられることと思います。つきましては、会員各位におかれましては、前述の趣旨をご理解いただき、以下のアンケートにご協力をお願い申し上げます（別封の返信用葉書にて回答をお願い致します。）。

爾後、アンケートの内容を分析し、機関誌発刊事業に反映致します。

なお、現役自衛官の会員各位におかれましては、原則として同窓会HPのPDF版を見ていただき、将来の冊子の発送は中止する方向で検討したいと考えておりますので、何卒ご理解ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

*****アンケート*****

該当箇所の（ ）内を○で囲んで下さい。

防大同窓会HPの閲覧……………（不 可 能）

「小原台だより」の冊子での配布……………（希望する）

ご意見等

機関誌「小原台だより」投稿のお願い

平成22年度機関誌「小原台だより」は、ご投稿頂きました方々のお蔭で編集することが出来、この場を借りまして厚く御礼申し上げます。ご承知のように、「小原台だより」は、同窓会会員の皆様方からの投稿記事によって成り立っており、また、現役自衛官や退職自衛官等の様々な分野でご活躍の様子が、同窓会会員各位の啓発に役立っております。

「小原台だより」を益々充実発展させるためには、皆様方からの積極的な記事の投稿が望まれますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

平成23年度機関誌「小原台だより」の投稿要領は、次のとおりです。

投稿通知期間：平成23年1月～6月 メール(jmk@bodaidsk.com)、又は、電話(03-3351-8910)で
投稿締め切り：平成23年10月15日(土)

投 稿 文 書：A4縦使用・横書きで、文字サイズ12Pとし、2,000文字(挿入写真の分を含む)
を基準とし、投稿者の顔写真を添付

投 稿 方 法：主としてメール(jmk@bodaidsk.com)、CD又は文書・写真の郵送も可
機 関 誌 担 当：同窓会本部事務局総務部 吉原 方人(20期・航空)

平成21年度防衛大学校同窓会決算書

平成22年3月31日現在
〔単位：円〕

項 目			21年度予算額	21年度決算	備 考
一 般 会 計	収入	会費	21,000,000	23,040,370	
		預貯金利息	2,600,000	2,684,091	
		雑収入	50,000	91,240	
		その他	0	344,912	20年度特別会計立替分
		収 入 計	23,650,000	26,160,613	
	支出	1 新入生に対する講話	0	0	
		2 各種競技会支援	540,000	387,817	
		3 期生会発会等支援	200,000	316,560	
		4 学生の部隊実習支援	1,000,000	982,209	
		5 顕彰碑・顕花式支援	150,000	357,983	
		6 開校祭支援	1,600,000	1,620,525	
		7 校友会対外活動支援	800,000	441,010	
		小 計	4,290,000	4,106,104	
		8 機関誌の発行	4,130,000	5,375,817	
		9 同窓会ホームページの運営			特別会計に計上
		10 会員の慶弔業務	1,000,000	543,636	
		11 各種競技大会による交流	150,000	153,370	
		12 地域支部等への助成	900,000	333,160	
		13 卒業留学生との交流	200,000	230,710	
		14 HVD 支援	300,000	307,140	
		15 HCD 支援	300,000	311,840	
		16 講演会・懇親会の実施	30,000	30,000	
		小 計	7,010,000	7,285,673	
		17 MCI 関連事業			特別会計に計上
		18 防衛協会への支援	100,000	100,210	
		小 計	100,000	100,210	
		19 代議員会の実施	1,600,000	1,404,204	
		20 期生会のHP開設助成	100,000	20,105	
		21 同窓会名簿の維持	30,000	2,900	
		22 期生会の名簿作成支援	800,000	80,420	
		23 地域支部等の設立支援	200,000	0	
		24 会費納入の促進	370,000	344,500	
		25 期生会との連絡網の整備	0	0	
		小 計	3,100,000	1,852,129	
		26 創立50周年記念事業	0	2,000,080	「防衛の務め」出版費
		27 法人化検討	200,000	0	
		28 中期事業計画の検討	0	0	
		小 計	200,000	2,000,080	
		事務費	600,000	763,866	
		通信費	440,000	363,781	
		交通費	550,000	674,830	
		会議費	150,000	116,363	
		事務員雇用費	2,000,000	2,000,000	
		事務局室賃貸費	2,850,000	2,754,124	
		小原台事務局運営費	160,000	54,943	
		小 計	6,750,000	6,727,907	
		予備費	2,200,000	0	
		支 出 計	23,650,000	22,072,103	
		積立金に繰り入れ		4,088,510	
		合 計	23,650,000	26,160,613	
特 別 会 計	収入	前年度からの繰越し	23,171,582	23,681,425	
		預貯金利息	24,000	32,000	
		収 入 計	23,195,582	23,713,425	
	支出	謝金等	720,000	728,820	
		同窓会システムの維持経費	180,000	170,276	
		通信費及び事務費	150,000	34,434	
		交通費	200,000	161,280	
		予備費	21,945,582	344,912	20年度立替分の振込
		支 出 計	1,250,000	1,439,722	
		次年度への繰越し	21,945,582	22,273,703	
		合 計	23,195,582	23,713,425	

会費納入状況

22.10.31 現在

期別	会員数	完納者数	完納率%	未完納者数			
				陸	海	空	計
1	339	320	94	11	6	2	19
2	359	345	96	10	2	2	14
3	484	452	93	17	12	3	32
4	465	434	93	22	8	1	31
5	529	483	91	26	11	9	46
6	477	428	90	39	6	4	49
7	503	459	91	30	7	7	44
8	467	418	90	36	8	5	49
9	498	477	96	1	9	11	21
10	498	449	90	28	11	10	49
11	495	448	91	29	8	10	47
12	466	408	88	34	11	13	58
13	468	407	87	38	11	12	61
14	491	455	93	21	2	13	36
15	463	449	97	9	3	2	14
16	428	403	94	10	4	11	25
17	498	454	91	20	10	14	44
18	423	397	94	9	7	10	26
19	446	415	93	13	16	2	31
20	383	352	92	17	3	11	31
21	491	468	95	13	4	6	23
22	475	411	87	33	9	22	64
23	410	388	95	8	8	6	22
24	448	415	93	8	18	7	33
25	424	401	95	11	4	8	23
26	507	468	92	26	7	6	39
27	389	378	97	8	1	2	11
28	453	422	93	17	8	6	31
29	393	358	91	16	9	10	35

期別	会員数	完納者数	完納率%	未完納者数			
				陸	海	空	計
30	412	345	84	48	13	6	67
31	432	410	95	15	6	1	22
32	406	356	88	31	13	6	50
33	449	376	84	45	20	8	73
34	430	375	87	40	9	6	55
35	496	479	97	9	5	3	17
36	354	344	97	6	2	2	10
37	384	347	90	16	7	14	37
38	338	261	77	63	10	4	77
39	356	327	92	8	11	10	29
40	388	327	84	35	22	4	61
41	405	364	90	24	14	3	41
42	407	366	90	20	12	9	41
43	431	385	89	23	15	8	46
44	381	220	58	118	39	4	161
45	351	157	45	131	20	43	194
46	360	281	78	71	7	1	79
47	388	338	87	32	11	7	50
48	425	375	88	23	15	12	50
49	325	294	90	26	4	1	31
50	369	320	87	27	13	9	49
51	411	370	90	17	13	11	41
52	424	344	81	20	25	34	79
53	431	383	89	21	21	5	47
54	364	320	88	15	18	11	44
*	336	320	95	2	12	2	16

会員数の項：会費納入対象者(留学生を除く防大卒業者数)
 *印の項：幹候校入校時の在校生に対する数値

会費納入のお願い

防衛大学校同窓会事務局長 林 直人

昨年同様、本年も54期生の陸・海・空幹部候補生学校在校者のほぼ全員に完納していただきました。衷心よりお礼申し上げます。

また、その他の期においても納入率の向上のため、期生会長及び代議員の皆様にご助力をいただき、成果をあげております。重ねて御礼申し上げます。

同窓会事務局では、「会員相互の親睦並びに母校の発展及び社会的活動への寄与」という会の目的を達成するため、同窓会の経済的な基盤を更に固めるべく、18年度から幹部候補生学校等を訪問するなどして会費納入の促進に努めております。

同窓会活動の趣旨を理解して頂き、会費未納の方（事務局で把握しておりますので下記連絡先にご確認下さい。）には、納入を宜しくお願い申し上げます。

【納入先】 ゆうちょ銀行

口座番号 00260 - 5 - □□24826 (百万及び十万の桁は無記入)

加入者名 防衛大学校 同窓会

通 信 欄 期別、要員別及び部隊名（現役の場合）を記入

【納入先】 三井住友銀行 飯田橋支店

口座番号 1270680

加入者名 防衛大学校同窓会 代表 國澤 輝生

なお、銀行振込の場合は、納入者の確認及び完納証等の発送のため、必ず振込者氏名、住所、期別、要員別、振込期日をeメール、Fax、電話等で下記にご連絡下さい。

【連絡先】

同窓会本部事務局：〒160-0003 東京都新宿区本塩町21-3-2

Tel/Fax：03-3351-8910

eメール：honbu@bodaidsk.com

【参 考】

普通会費

・防大本科卒業生

卒業時の3尉俸給月額（1号俸）の1/4（千円未満切捨）

・防大研究科卒業生（一般大学卒業者）（19年度改正）

卒業年度の3尉俸給月額（1号俸）の1/8（千円未満切捨）

延 滞 金 1,000円×（完納年度－3尉任官年度又は研究科卒業年度）
（防衛大学校同窓会会費に関する細則より）

会費算出例：45期生で過去に分納がない場合

普通会費 60,000円、完納年度 23年度、3尉任官年度 13年度（14.3）

23年度納入額 60,000円＋1,000円×（23－13）＝70,000円

（詳細は同窓会事務局までお問い合わせ下さい）

■ ■ 同窓会名簿管理に関するお知らせ ■ ■

I 名簿の維持管理

会員名簿は各種同窓会活動の基盤となるものであり、同窓会事務局としましてはできるだけ最新のデータの確保と厳正な維持管理に努めております。データの確保については、主として以下の要領で実施しておりますので、会員の皆様のご協力をお願い致します。

1 各期生会からの通知

個人情報保護法制定等を受け関係各所からのデータ収集が難しくなったことから、名簿の修正は、平成16年度から各期生会代議員に、平成19年度からは各期生会業務幹事に対して、例年8月の定期異動後をお願いしております。

平成21年度からは電子メールの活用を図り、期生会との連携の強化を図りつつデータの収集に努めさせて頂いております。

業務多忙にも拘らず担当して頂いた皆様、ご協力有難うございました。

2 会員個人からの通知

同窓会ホームページ上の「異動連絡」の項は、削除いたしました。今後は事務局への電子メールまたは電話等での連絡をお願いします。

II 利用目的及びプライバシーポリシー

1 利用目的

次の目的で皆様の個人情報を利用又は提供します。

- (1) 同窓会各種事業推進のための連絡
- (2) 機関誌「小原台だより」の発送
- (3) 会員の慶弔の実施
- (4) 期生会、校友会、教務班等各種活動への協力
- (5) 地域支部等への協力

2 プライバシーポリシー

以下のプライバシーポリシーに従い個人情報の適切な保護に努めております。

- (1) 利用目的の範囲内で収集、管理します。
- (2) 会員皆様の承諾なしに目的外の利用及び提供はしません。
- (3) 会員の皆様が、個人情報の照会、修正、削除等を希望される場合は、速やかに対応します（同窓会本部事務局人事部担当へご連絡下さい。）。
- (4) 個人情報へのアクセス、破壊、改ざん及び漏洩等の無いように適切に管理します。

期生会会長・代議員名簿

22年11月1日現在

期	期生会会長					代議員									業務幹事				
	氏 名				要員	陸：氏 名			海：氏 名			空：氏 名			氏 名				要員
1	小西	生	海	宮	躬	田	中	治	松	山	主	一	郎	藤	井	勝	利	海	
2	松力	武	空	高	彦	小	濱	孝	高	澤	市	哲	郎	高	澤	市	郎	空	
3	庄武	凱	海	齊	行	手	塚	水	出	口	哲	一	郎	新	谷	哲	次	空	
4	松野	悠	陸	西	策	長	嶺	成	小	川	一	五	朗	奧	田	勇	芳	海	
5	増島	榮	空	辻	二	大	横	勇	近	藤	剛	祐	作	淺	見	重	宣	陸	
6	宮元	敏	陸	二	宣	関	川	也	道	畑	義	司	彦	二	松	重	英	陸	
7	吉本	武	空	八	允	高	見	博	荒	蒔	一	嘉	嘉	若	木	紀	夫	空	
8	竹河	捷	空	横	利	梶	山	夫	鈴	木	益	康	三	荒	林	貞	雄	空	
9	仲摩	次	海	小	夫	津	島	邦	安	松	益	夫	孝	小	東	勝	昭	海	
10	石川	亨	海	嶋	廣	坂	野	昭	赤	羽	芳	孝	一	阿	保	文	敏	陸	
11	野中	男	陸	洞	郎	竹	澤	訓	橋	岡	憲	一	弘	藤	本	四	郎	陸	
12	牧本	近	海	藤	雄	上	本	茂	花	岡	憲	一	典	鈴	木	一	典	海	
13	吉田	正	空	関	由	小	津	隆	稻	葉	啓	喜	夫	有	井	誠	弘	空	
14	道家	成	海	小	則	斎	伯	夫	江	口	直	陽	陸	佐	藤	由	喜	陸	
15	折木	一	陸	石	生	小	川	厚	鈴	木	政	三	博	石	川	昇	三	陸	
16	河野	登	海	中	健	宮	村	聰	長	崎	一	則	則	柊	枝	智	男	陸	
17	杉本	彦	陸	岩	聰	加	切	二	岩	原	美	男	明	西	村	克	則	海	
18	酒井	夫	陸	西	二	曾	井	夫	松	崎	明	治	一	河	上	安	男	陸	
19	佐藤	俊	海	東	夫	山	海	裕	山	井	秀	功	顯	竹	武	修	功	陸	
20	河宮	広	陸	小	一	福	岩	夫	若	林	浩	介	也	大	伊	正	功	海	
21	岩櫻	一	陸	岩	敦	武	田	敦	吉	木	仁	孝	進	伊	小	正	夫	陸	
22	高屋	治	陸	小	茂	小	手	茂	佐	村	塚	彦	也	小	田	正	夫	陸	
23	小田	茂	陸	小	人	小	浦	之	遠	目	和	哲	郎	時	山	威	司	陸	
24	馬堀	彦	陸	中	繁	山	崎	司	村	竹	誠	一	明	石	植	茂	己	空	
25	前田	晴	陸	石	典	池	丸	一	有	柴	利	克	紀	沖	野	克	紀	空	
26	阿部	陽	空	山	司	山	根	文	小	笠	卓	一	彦	小	原	卓	三	空	
27	中佐	知	空	大	正	小	迫	宏	吉	泉	一	好	好	熊	達	好	正	空	
28	宇佐	好	空	宇	好	小	達	之	宇	佐	和	英	英	足	美	和	好	空	
29	石井	浩	空	森	浩	小	川	康	霜	中	和	豐	一	山	佐	崎	武	空	
30	湯下	徹	陸	湯	太	下	兼	郎	中	大	和	浩	一	湯	兵	下	兼	陸	
31	清堤	幸	海	小	學	小	澤	貴	大	中	大	輔	大	堤	庫	田	和	陸	
32	武田	克	陸	武	克	武	林	克	中	山	嘉	主	理	武	田	切	主	空	
33	鎌田	淳	空	澤	実	青	繁	仁	岩	原	靖	洋	弘	阿	部	山	佳	海	
34	高庄	典	海	青	史	青	木	樹	坂	寺	洋	悠	平	青	近	藤	太	陸	
35	原田	明	陸	石	幸	清	岡	弘	中	里	真	剛	花	近	田	木	裕	海	
36	吉水	一	陸	桐	幸	納	谷	希	齋	藤	剛	竹	吾	清	田	上	剛	陸	
37	和田	史	海	桐	弘	益	谷	宇	山	上	真	剛	史	柏	山	田	剛	海	
38	吉塚	勇	空	益	宇	成	塚	優	荒	部	直	健	郎	小	山	田	剛	陸	
39	成濱	卓	陸	成	優	成	田	優						益	澤	金	剛	空	
40																			
41																			
42																			
43																			
44																			
45																			
46																			
47																			
48																			
49																			
50																			
51																			
52																			
53																			
54																			

同窓会本部・支部等の役員紹介

平成22年度同窓会本部役員

会 長	先崎 一	12 (陸)	50 周 年	岩城 征昭	20 (陸)	経 理 部 長	田中 仁志	18 (空)
副 会 長	奥村 快也	14 (陸)	総 務 部 長	菊池 伯	18 (陸)	経理部長補佐	國澤 輝生	19 (陸)
副 会 長	斎藤 隆	14 (海)	総務部長補佐	塚田 章	19 (陸)	経 理 部	畑田 実	20 (海)
副 会 長	長谷 莞	14 (空)	総 務 部	佐藤 秀樹	20 (陸)	M C I 部長	明比 章	18 (海)
副 会 長	折木 良一	16 (陸)	総務部新規事業	松下 睦裕	19 (空)	MCI部長補佐	松山 栄幸	19 (海)
理 事	奥山 繁樹	14 (陸)	総 務 部	戸田 友敬	20 (空)	M C I	福田 裕	20 (陸)
理 事	中尾 誠三	14 (海)	総務部HP・機関誌	松田 和彦	19 (空)	MCI技術指導	村田 和美	17 (陸)
理事兼事務局長	林 直人	15 (陸)	総務部HP・機関誌	吉原 方人	20 (空)	事務局HP技術担当	荒木 紀夫	8 (空)
理 事	直海 康寛	16 (陸)	人 事 部 長	持永 昇三	18 (海)	小原台事務局長	尾上 定正	26 (空)
理 事	新野 修	16 (空)	人事部長補佐	井上 勝	19 (空)	小原台局長補佐	山本 政雄	24 (海)
理 事	尾形 誠	23 (空)	人 事 部	丸野 礼治	19 (空)	小原台総務部長	保泉 哲也	26 (海)
理 事	松尾 幸弘	24 (陸)	人 事 部	今井 恵治	20 (陸)	小原台渉外部長	枇杷 利政	27 (陸)
理 事	槻木 新二	24 (海)	人 事 部	宮崎 行隆	20 (海)	小原台事業部長	藤田 周三	30 (空)
理 事	岩成 真一	24 (空)	事 業 部 長	門野 睦廣	18 (陸)	小原台企画係長	金野 浩子	40 (空)
会 計 監 事	丸田清次郎	13 (陸)	事業部長補佐	斎藤 力	19 (海)	小原台総務係長	米田 将治	40 (陸)
会 計 幹 事	岩城 誠	15 (海)	事業部 HCD/HVD	山形 克己	20 (陸)	小原台事業係長	中野 昌英	41 (陸)
会 計 監 事	屋根 正義	17 (陸)	事業部 囲碁・留学生	風間 敏榮	19 (陸)	小原台広報係長	小佐田基史	41 (海)
50周年統括部長	東郷 行紀	18 (海)	事業部 囲碁・留学生	内藤 正	20 (空)	小原台事業係長	宇野 隆浩	45 (陸)
50 周 年	岡崎 宗男	18 (陸)	事業部 テニス・助成	畔野 一郎	19 (陸)	小原台総務係	中澤 和臣	49 (陸)
50 周 年	吉川 勝三	18 (空)	事業部 テニス・助成	上田 達朗	20 (海)	小原台広報係	小坂 英之	50 (陸)
50 周 年	笠原 久	18 (空)	事業部 ゴルフ・講演	寺谷 猛	19 (陸)			
50 周 年	平野 均	19 (陸)	事業部 ゴルフ・講演	榊 喜隆	20 (陸)			

平成22年11月15日現在

地域支部等役員

北海道地域支部	支部長	穴口 一男	9 陸	広島地区支部	支部長	松本 暢夫	11 海	佐賀地区支部	業務幹事	田中 豊博	12 陸
北海道地域支部	事務局長	角 謙二	30 陸	広島地区支部	業務幹事	森田 寧	17 海	長崎地区支部	支部長	新野 克洋	9 海
東北地域支部	支部長	吉川 洋利	14 陸	山口地区支部	支部長	重永 照彦	8 空	長崎地区支部	業務幹事	樋口八洲太郎	10 海
東北地域支部	業務幹事	原田 富雄	17 陸	山口地区支部	事務局長	高橋 佳嗣	11 陸	熊本地区支部	支部長	斉藤 四郎	9 陸
栃木地区支部	支部長	君嶋 信	3 陸	四国地域・香川支部	事務局長	松浦 孝昇	7 陸	大分地区支部	支部長	澤村庄次郎	7 陸
栃木地区支部	事務局長	三代 武徳	8 陸	四国地域・徳島支部	支部長	青木 初年	9 空	宮崎地区支部	支部長	此本 皓男	10 陸
群馬地区支部	支部長	石橋 輝治	5 陸	徳島地区支部	事務局長	清水 祥人	12 陸	宮崎地域支部	事務局長	二宮 成一	14 陸
群馬地区支部	事務局長	小島 健二	14 空	香川地区支部	支部長	戸松 久忠	6 陸	鹿児島地区支部	支部長	平田 辰雄	10 海
北陸地区支部	支部長	濱谷 隆平	6 陸	高知地区支部	支部長	岡林 靖之	8 海	鹿児島地区支部	事務局長	村山 文彦	14 陸
北陸地区支部	事務局長	西川 清	15 陸	高知地区支部	事務局長	川田 公一	16 空	沖縄地域支部	支部長	山縣 正明	14 陸
東海地区支部	支部長	佐藤裕紀夫	12 空	愛媛地区支部	支部長	赤岡 順	4 陸	沖縄地域支部	事務局長	天野 道夫	37 陸
東海地区支部	事務局長	木原 文雄	12 陸	愛媛地区支部	事務局長	瀬川紘一郎	10 海	小原台クラブ	支部長	岩崎 俊雄	9 陸
関西地域支部	支部長	田川 睦夫	12 陸	九州地域支部&福岡地区支部	支部長	竹下 治雄	9 陸	小原台クラブ	事務局長	山田 耕平	40 空
関西地域支部	事務局長	新見 泰朗	17 陸	九州地域支部	業務幹事	藤井 敬文	12 陸	桜 華 会	会長(支部長)	塚口 千枝	40 陸
岡山地区支部	支部長	高橋 正憲	6 空	九州地域支部	事務局長	西山 洋	13 陸	桜 華 会	事務局長	吉田ゆかり	40 空
岡山地区支部	業務幹事	永岑 富彦	10 陸	佐賀地区支部	支部長	光吉 達幸	10 空				

会 員 の 訃 報

平成21年12月1日から平成22年11月20日までに届いた会員の訃報を紹介します。なお詳細は防衛
大学校同窓会ホームページでご覧下さい。

1 期生

(陸) 近藤 一視 4月3日
(空) 前田 武彦 7月8日
(陸) 松村 忠成 10月30日

2 期生

(海) 宮本 武彦 12月1日
(陸) 松村 劼 1月28日
(陸) 廣瀬 直 3月14日

3 期生

(海) 藤田 東郷 2月4日

4 期生

(陸) 末廣 計嘉 12月26日
(海) 森 敏成 3月31日
(空) 濱野 直道 5月10日
(空) 高橋 顕一 7月22日
(海) 中川 克彦 8月8日
(陸) 長坂 政男 8月24日
(陸) 五十嵐篤之 9月28日

5 期生

(陸) 井上 陽市 9月17日
(空) 桑野 喬司 10月13日

6 期生

(空) 齋藤 龍男 6月23日

7 期生

(空) 佐藤 吉克 1月29日
(空) 別府 芳 1月29日
(海) 檀橋 次郎 5月1日

8 期生

(陸) 成井 宏安 12月1日

9 期生

(陸) 久々 宮剛 12月13日
(陸) 林 茂 1月9日
(海) 西本 勝昭 5月22日
(海) 久松 武宏 8月8日

10期生

(陸) 谷川 洋 2月1日
(空) 弘中 勝彦 6月25日
(陸) 加倉井克拓 8月23日
(陸) 土橋 健二 9月24日

13期生

(陸) 香川鬼子男 12月1日
(海) 溝下 素夫 10月6日
(陸) 蓑毛 順次 11月13日

14期生

(空) 村上 侑 3月1日
(空) 鈴木 仁 5月10日

16期生

(海) 清原 洋 2月23日

17期生

(陸) 藤本 博久 2月9日
(陸) 江口 育夫 3月31日

19期生

(陸) 阿部 金二 8月16日

20期生

(空) 内田 雅寛 5月26日

21期生

(海) 松原 正幸 12月16日
(陸) 原 進 8月8日

24期生

(陸) 太田 尚志 3月16日

26期生

(海) 信垣 育司 6月30日

45期生

(陸) 河本 定彦 3月23日

編集：松田 和彦 (19期・空)、吉原 方人 (20期・空)

印刷：(株)エイコープリント



第54期生卒業式

防衛大学校同窓会本部連絡先

〒160-0003 東京都新宿区本塩町21-3-2
TEL・FAX 03-3351-8910
E/M: honbu@bodaidsk.com